



くものいと

Kumo-no-ito

No. 55

関西クモ研究会

March 2022

くものいと No. 55

March 2022

目次

奈良県内のカネコトタテグモの新産地と観察記録 関根幹夫	1
和歌山県北部のキノボリトタテグモの新産地 関根幹夫	6
京都市市民によるヒトエグモ発見情報 藤野義人	8
奈良県桜井市三谷・山野草の里で確認したクモ 関根幹夫	11
滋賀県甲賀市におけるカトウツケオグモの記録 河瀬直幹	13
12月まで長生きしたコガネグモおよびナガコガネグモ 野口大介	15
「家蜘蛛」とはどんなクモか? 関根幹夫	17
11月から12月にかけてのシロブチサラグモの成虫の出現 岡田純二	21
多良間島(沖縄県)のクモ 加村隆英	24
長野県で見つかったセアカゴケグモ 清水裕行	27
コガネグモダマシは何時に網を張るのか 船曳和代	32
産卵を2回行うジョロウグモはどれくらいいるか(兵庫県姫路市における2015年の調査) 船曳和代	36
産卵を2回行うジョロウグモはどれくらいいるか(その2)(兵庫県姫路市における2016, 2017年の調査) 船曳和代	43
京都府新記録のクモ類 吉田真	52
ヒトエグモの追加記事 西川喜朗	54
訃報: 山野忠清さんの名言 清水裕行	55
関西クモ研究会2021年度例会の記録	57
関西クモ研究会2020年度会計報告	59

奈良県内のカネコトタテグモの新産地と観察記録

関根 幹夫

A new locality record and notes on the trapdoor spider, *Antrodiaetus roretzi*,
from Nara Prefecture

Mikio Sekine

はじめに

カネコトタテグモ *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch 1878) は、林縁や林道沿いのあまり日の当たらない土の崖に、深さ 10~20 cm の横穴を掘り、入口に両開きの扉（観音開き戸）をつける。扉は周囲の地表によく似せてつくり、ぴったりと閉じられていると非常に発見しにくい。本種は、山形県、岩手県以南から兵庫県、岡山県までの間で局地的に生息しており（千国 1989）、環境省の準絶滅危惧（NT）に指定されている（西川 2014）。奈良県では、奈良公園の春日山遊歩道・月日亭付近の 1 ヶ所での生息が報告されているが（金野・畑守 1994）、この生息記録以後、20 年以上確認情報が無く、その後信頼すべき調査が行われていないため、奈良県版レッドデータブック 2016 改訂版では、絶滅寸前種に選定されている（関根 2017）。

今回、奈良県内における本種の新産地を確認したのでここに報告する。

新産地と観察記録

〔地点 A〕2021 年 3 月 27 日、奈良県生駒郡三郷町立野、34°36'13.08"N, 135°40'44.65"E, 標高 227 m において、本種の住居 1 つを確認した。住居は、横に這った木の根の下で、雨水のかからない北向きの崖地の地表から約 40 cm の高さにあった（図 1）。ぴったりと閉じられている扉を開くことにより、本種に特徴的な観音開き戸を確認することができた（図 2）。住居入口の口径は 12 mm であった。翌朝に住居を確認すると、住居入口の扉は閉じていた。このことから、本種は夜間に扉を閉じるということがわかった。

本種の横穴は、木の根や岩石によって上下左右に曲がって延びているものが多い（新海 2017）、調べるのが難しいことから、種の保全を考慮し、採取せずに観察を行うこととした。複数回にわたり夜間観察を行ったが、本種は、横穴の奥に居て住居の入口には出てこなかった。本種は、夜間に扉の内側まで出てきて、前を通る昆虫やワラジムシなどを跳び出して捕えると報告されていることから（新海 2017）、ダンゴムシを住居入口付近に放したが、クモは住居から出てこなかった。

本種が活動する時間帯は何時ごろであろうか。岐阜県山県郡高富町において、本種の扉の作成行動を 1998 年 8 月 3 日夜から翌 4 日未明の間、ビデオ撮影をした報告が



図 1. 横に這った木の根の下，雨水のかからない北向きの崖地につくられたカネコトタテグモの住居（円内）.



図 2. カネコトタテグモの両開きの扉（観音開き戸）を開けたところ.

あり，扉を除去した後，本種が扉をつくる過程は，午後 7 時 55 分から午後 10 時 49 分の間であったと報告されている（永井・新海 1999）.

この報告を参考に，本種の観察を行ったところ次の結果が得られた.

- 1) 4 月 20 日午後 8 時 13 分（気温 13℃，晴天で月明かり）. 住居入口の扉を開き，

ヘッドランプで照らしながら観察を開始した。

- 2) 同日午後 9 時 26 分. 扉が閉じかかったので, 住居入口を撮影した (図 3). 住居入口の扉は, 見ている間に閉じた (図 4).

[地点 B] 2021 年 4 月 23 日, 奈良県生駒郡三郷町立野, 34°36'11.52"N, 135°40'58.97"E, 標高 197 m において, 本種の住居 1 つを確認した. この地点 B は, 地点 A から東へ 380 m 離れた位置にある. 住居は, 木の根元で雨水のかからない, 北向きの崖地の地表から約 90 cm の高さであり, 住居入口の口径は 15 mm であった.

地点 B における観察結果を以下に示す.

- 1) 4 月 23 日午後 1 時 35 分 (気温 23°C, 晴れ). 住居入口の扉を開けておいた.
- 2) 同日午後 8 時 35 分 (気温 14°C, 晴れ). 扉は閉じていた. 再び扉を開き, ヘッドランプで照らしながら観察を開始した.
- 3) 同日午後 9 時 13 分 (気温 14°C, 晴れ). クモは一瞬にして扉を閉じた. 観察を終了し, 再び扉を開けておいた.
- 4) 翌日 24 日午前 4 時 39 分 (気温 13°C, 晴れ). 扉は閉じていた.

この後, 複数回にわたり夜間観察を行ったが, 住居入口の扉が閉じられるところを観察することはできなかった. いずれの場合も翌朝には住居入口の扉は閉じていた.

- 5) 5 月 6 日午後 7 時 45 分 (気温 15°C, 曇り). 住居入口の扉を開き, ヘッドランプで照らしながら観察を開始した.
- 6) 同日午後 10 時 25 分 (気温 14°C, 曇り). 観察を終了した. 観察中, 住居入口の扉は開いたままであり, 変化はみられなかった.
- 7) 翌日 7 日午前 10 時 5 分 (気温 19°C, 曇り). 扉は開いたままで変化はみられなかった. この住居入口の右下隣に, 新たな入口がつくられていた (図 5). 写真撮影のため, 新たな入口の扉を開けた後, 扉は開けたままにしておいた.
- 8) 同日午後 3 時 40 分 (気温 16°C, 小雨). 開けたままにしていた新たな住居入口の扉は閉じていたが, 以前の入口の扉は開いたままで変化はみられなかった.
- 9) 翌々日 8 日午前 8 時 31 分 (気温 18°C, 晴れ). 以前の入口の扉も閉じていた.

考 察

観察結果 7) について: 何度も扉を開けられたことから, クモはこの入口の扉を閉じることを止め, 新たな入口と扉をつくったものと思われる. すなわち, カネコトタテグモは, 住居入口への度重なる干渉を受けると, 新たな入口と扉をつくると考えられる.

観察結果 9) について: カネコトタテグモの天敵の筆頭はムカデであり (吉倉 1987), トタテグモ類の天敵として, タマゴクロバチ科やクモバチ科 (旧ベッコウバチ科) のハチ類が知られている (高須賀 2015). このような外敵に対して住居入口の扉を開け



図3. 住居入口の扉を閉じるカネコトタテグモ.



図4. カネコトタテグモによって住居入口の扉は閉じられる.

たままにしておくことは、無防備と思われる。2つの住居入口を持つことになった地点Bのクモは、住居入口の扉を閉じる行動に時間差はあったものの、両方の住居入口の扉を閉じた。これは、外敵防御の行動と考えられる。



図 5. カネコトタテグモの扉が開いたままの住居入口（左上）と撮影のために扉を開けた新たにつくられた住居入口（右下）。

引用文献

- 千国安之輔 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 偕成社, 東京.
- 金野晋・畑守有紀 1994. 奈良公園のトタテグモ類. Pp. 188-192. In: 奈良公園の自然. 奈良教育大学, 奈良.
- 永井均・新海明 1999. カネコトタテグモの扉づくり. *Kishidaia*, 77: 35-39.
- 西川喜朗 2014. カネコトタテグモ. P. 57. In: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編). レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-7 その他無脊椎動物 (クモ形類・甲殻類等). ぎょうせい, 東京.
- 関根幹夫 2017. カネコトタテグモ. P. 340. In: 奈良県レッドデータブック改訂委員会 (編). 大切にしたい奈良県の野生動植物-奈良県版レッドデータブック 2016 改訂版-. 奈良県くらし創造部景観・環境局 景観・自然環境課, 奈良.
- 新海栄一 2017. 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京.
- 高須賀圭三 2015. クモと天敵. Pp. 61-81. In: 宮下 直 (編). クモの科学最前線. 北隆館, 東京.
- 吉倉 眞 1987. クモの生物学. 学会出版センター, 東京.

和歌山県北部のキノボリトタテグモの新産地

関根 幹夫

Several localities of the trapdoor spider, *Conothele fragaria*, newly recorded from the northern part of Wakayama Prefecture

Mikio Sekine

キノボリトタテグモ *Conothele fragaria* (Dönitz 1887) (トタテグモ科) は、日光の直射しない適度な湿度が保たれている岩上や古木の樹皮上に、コケや樹皮をはりつけた長さ 2~3 cm の落花生の殻によく似た袋状住居をつくり入口に片開きの扉をつけ (千国 1989), 環境省のレッドリストで準絶滅危惧 (NT) に選定されている (西川 2014). 本種の和歌山県内の既知産地は、和歌山市 (友ヶ島), 海南市 (藤白神社~藤白峠, 春日の森), 田辺市 (奇絶峡, 天神崎), 新宮市 (雲取温泉) が報告されており (八木沼 1955; 東條 1991, 1992, 1998; 和歌山クモの会事務局 1997; 稲垣 1998, 1999), 東條 (2001) によれば, 本種は和歌山県下全域に生息する.

2018 年から 2021 年にかけて, 和歌山県の北部地域を調査した結果, 本種の生息地を確認したので, ここに報告する. データは市町村名, 地点名, 標高, 調査日 (YYYY-MM-DD) の順に記した.

【新産地】

和歌山市和歌浦西 2-1-20, 紀州東照宮 (イヌマキの樹幹と弁財天・岩表面), 33 m, 2 空巣, 2018.10.31.

橋本市隅田町垂井 622, 隅田八幡神社 (境内と周囲の石表面), 123 m, 2 空巣, 2019.04.03.
紀の川市粉河 2788, 粉河産土神社 (ツブラジイ樹幹とスギの枯株), 85 m, 2 空巣, 2019.04.24.

紀の川市穴伏 464, 名手八幡神社 (参道横ツブラジイ樹幹), 69 m, 1 空巣, 2019.04.24.
伊都郡かつらぎ町島 447, 巖島神社 (島内社叢ミミズバイ (ハイノキ科) 樹幹), 53 m, 1 空巣, 2019.04.12.

伊都郡かつらぎ町三谷 631, 丹生酒殿神社 (三谷坂登山道入り口・スギの枯株), 63 m, 1 空巣, 2019.04.12.

海草郡紀美野町小畑 625, 野上八幡宮 (境内の石表面), 74 m, 2 空巣, 2021.03.26.

以上いずれも関根確認.

引用文献

千国安之輔 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 偕成社, 東京.

- 稲垣成二 1998. 和歌山クモの会 総会と観察会 (1997 年度). 和歌山クモの会会報, 8: 7-9.
- 稲垣成二 1999. 雲取温泉でクモを採る. 和歌山クモの会会報, 9: 12-14.
- 西川喜朗 2014. キノボリトタテグモ. P. 58. In: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編). レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—7 その他無脊椎動物 (クモ形類・甲殻類等). ぎょうせい, 東京.
- 東條清 1991. 海南市藤白神社～藤白峠観察会クモ類リスト. 和歌山クモの会会報, 1: 10-11.
- 東條清 1992. 1991 年度「和歌山クモの会」総会と観察会. 和歌山クモの会会報, 2: 3-5.
- 東條清 1998. 春日の森のクモ類. 和歌山クモの会会報, 8: 1-4.
- 東條清 2001. 和歌山のクモ. 著者自刊, 242 pp.
- 八木沼健夫 1955. 友ヶ島のクモ. Nature Study, 臨時号: 20-21.

京都市市民によるヒトエグモ発見情報

藤野 義人

はじめに

筆者が勤務する京都市青少年科学センターでは市民からの理科相談に応じている。2021年4月13日、市民からヒトエグモだと思われるクモを発見し、採集したので、同定して欲しいとの連絡が入った。メールに添付された画像を見ると確かにヒトエグモであった。この情報は地元新聞に掲載された。ここでは、市民によるヒトエグモ発見情報とその後の経緯について報告する。

発見、採集の記録

2021年4月12日、京都市上京区長休寺（京都市上京区寺町通鞍馬口下ル高德寺町348）において、西村知代氏（京都市伏見区在住）が発見、採集。

発見、採集の様子（西村氏のメモより抜粋；括弧内は藤野による）

- ・墓地の隅に積まれた瓦の下で発見した。5～6枚の瓦が2列地面に置かれていた。
- ・2列の瓦積みとも、上から1枚目の下にはヒトエグモはいなかった。
- ・一つの隙間に体サイズの異なる数頭が一緒にいることもあった。
- ・採集し、持ち帰ったのは4頭で、サイズの異なる個体を選んで採集した。
- ・他にもヒトエグモが複数確認できた。（採集された個体は成体雌2頭、幼体2頭。）
- ・瓦の下には脱皮殻があり、ごく少量の柔らかい糸も付いていた。
- ・採集する際、ヒトエグモの脚は少しの刺激でポロポロと取れた。自切？



図1. 西村知代氏が採集したヒトエグモ。

新聞記事の反響

今回の発見は地元新聞社（京都新聞社）で取り上げられ、2021年6月15日朝刊に掲載された（図2）。この記事を契機に、多くの市民からの情報が寄せられることを期待した。早速、6月16日に連絡が入った。京都市在住のSさんから、2019年に実家の滋賀県大津市で見つけたとの事、2枚の写真が添付されていた（図3）。写っていたのは2枚ともヒトエグモ雄であった。

更に複数の同僚からも自宅（京都市東山区、伏見区）で見たことがあるという情報が得られた。更なる発見情報を期待しているが、現時点（2021年9月18日）では新しい情報は届いていない。

府の絶滅危惧種
ヒトエグモ発見



西村さんが見つけたヒトエグモ。側面から見ると、特徴である体の薄さがよく分かる

大学時代から10年近く探し続けてきた珍しいクモを、京都市伏見区の女性が上京区の墓地で見つけた。父の墓参に訪れて見つけたといい、「生き物好きだった父が、プレゼントをくれたのかな」と笑顔で話す。

伏見の西村知代さん

生花店で働く西村知代さん(29)。子どものころから虫や魚に興味があり、近畿大農学部水産学科で魚の寄生虫について研究した。

大学在学中、虫好きの友人から「京都に珍しいクモがいる」と聞き、興味を持った。以来、手探りで探し続けてきた。「市動物園の壁に張り付いていた」とのネット情報を基に現地を訪ねてみたり、石の隙間をのぞいてみたりしてきたが見つからなかった。

探していたのは、体の厚さが1〜2ミクロメートルの中で最も薄い「ヒトエグモ」。

10年越し“逢瀬” 情熱尽きず

「モ」。府レッドデータブックで絶滅危惧種に指定されており、市青少年科学センター(伏見区)によると、京都市や大阪府など関西圏を中心に分布し、市内11区で確認されているものの、発見例は少ないという。

亡くなった父の誕生日の今年4月12日。墓参に訪れ、積まっていた古い瓦を何げなくめくった。さっと散ったクモは、本やネットで見続けてきた姿だ



小瓶に入れたヒトエグモを見つめる西村さん。「次はどこかの県で初確認したい」と情熱は尽きない(京都市伏見区)

「薄い体で隙間に入り込むので、なかなか見つからない。研究者ではない人が見つけた意義は大きい」と強調する。ヒトエグモの生態には謎が多いといいい、「一般の人が見つけてくれるようになれば、解明が進む」と期待する。

西村さんは「ますます興味が深まった。府内初確認でなかったのは残念だが、次はどこかの県で初確認者になりたい」と目標を掲げる。(中西英明)

図2. 京都新聞朝刊の記事(2021年6月15日)。発見、採集した西村知代さんの経歴などとともにヒトエグモが紹介された。

市民からの情報

ヒトエグモに関する市民からの情報は、私が知る限り今回で二度目である。一度は30年前に科学センターに勤務していた時、「紙みたいなクモがいました」と京都市中京区の方が箆笥の着物を整理していて見つけたヒトエグモを採集して持ってこられ

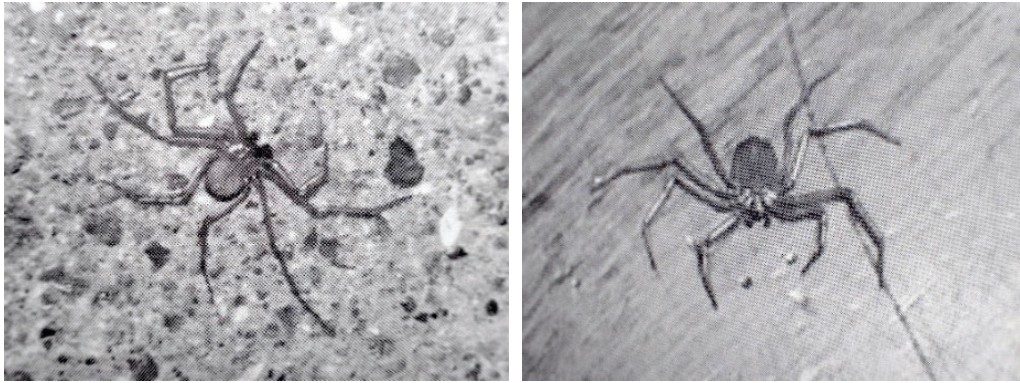


図3. 京都市在住のSさんが2019年に滋賀県大津市で発見したヒトエグモ.

た時であった。今回の情報が二度目であった。「扁平な奇妙なクモを見つけました」という内容ではなく、一人の市民研究者からの情報であった。西村氏がヒトエグモについての知識があったこと、ヒトエグモを自分で見つけてやろうと思っていたこと、好奇心旺盛でもしかして瓦積みの隙間にいるかもしれないと思って調べてみたことによってもたらされたものであった。ヒトエグモについて関心を持ち、10年近くも探し続けてこられた西村氏の情熱に感銘を受けた。

筆者はヒトエグモを京都市内全区で確認している(藤野 2017)。古い社寺や民家の多い京都市では発見されやすいと考えるのだが、扁平な体形で隙間に潜むヒトエグモは人目につきにくく、クモに対する嫌悪感も加わってか市民の中ではほとんど知られていない。今回、新聞社による情報発信によりわずかであるが市民からの情報が得られた。ヒトエグモに限らずクモ類全般に関して興味関心を高めるための情報発信の重要性を感じた。

謝 辞

ヒトエグモの生態についての情報を提供していただいた西村知代氏、生息情報をくださった皆様、記事にして情報発信していただき、本誌への転載を快諾していただいた京都新聞社並びに記者の中西英明氏に御礼いたします。

文 献

河瀬直幹 2017. 滋賀県におけるヒトエグモ発見と新聞等を通じた市民からの情報収集. くものいと, 50: 52-55.

藤野義人 2017. 京都府京都市におけるヒトエグモの生息分布調査. くものいと, 50: 48-51.

奈良県桜井市三谷・山野草の里で確認したクモ

関根 幹夫

A list of spiders in Sanyaso-no-sato in Sakurai City, Nara Prefecture

Mikio Sekine

はじめに

「山野草の里」は、平成 27 (2015) 年度に環境省により選定された「生物多様性保全上重要な里地里山 (略称「重要里地里山」) (500 箇所) のひとつで、奈良県桜井市の北東部、大和川上流の標高 400~500 m の三谷集落に位置する。ここは、丘陵地の二次林と水田を中心としたモザイク状の土地利用が維持されており、大規模な基盤整理が行われなかったため、多くの山野草が残っている。山野草の保護や放棄地の復元等によって良好な里地里山生態系が保全されている。2021 年の 6 月 11 日と 11 月 5 日にクモ類調査を行ったのでその結果をここに報告する。当地をご紹介いただいた「NPO 法人 山野草の里づくりの会」の福島由美子さんと調査に便宜を図っていただいた同会のみなさんに厚く感謝申し上げます。

山野草の里・クモ類リスト

観察日：2021 年 6 月 11 日，天気：晴れ，気温：28°C

2021 年 11 月 5 日，天気：晴れ，気温：17°C

観察場所：奈良県桜井市三谷・山野草の里

同定者：関根幹夫

採集あるいは確認されたクモは以下のとおり。科の分類と配列は谷川 (2020) に準拠した。採集個体数は省略し、雌雄・成幼の区別だけを示した。♀♂を記していないものはメス，y は幼体を示す。学名は省略した。

ジグモ科：ジグモ (巣を確認)。

ヒメグモ科：オナガグモ (11/5)，オオヒメグモ (6/11, 11/5)，オオヒメグモ属の一種 y (11/5)。

コガネグモ科：サガオニグモ (6/11, 11/5)，コガネグモ y (6/11)，チュウガタコガネグモ (6/11)，ギンメッキゴミグモ (6/11, 11/5)，カラスゴミグモ (6/11)，ギンナガゴミグモ (6/11)，ゴミグモ (6/11, 11/5)，ヨツデゴミグモ (11/5)，ヤマシロオニグモ y (6/11)，ジョロウグモ (11/5)，アカショウジョウグモ属の一種 y (11/5) (図 1)。

アシナガグモ科：オオシロカネグモ (6/11)，コシロカネグモ (6/11, 11/5)，キンヨウグモ (11/5) (図 2)。

サラグモ科：クスミサラグモ (6/11, 11/5)。



図1. アカショウジョウグモ属の一種 (幼体).



図2. キンヨウグモ (♀).

チリグモ科：ヒラタグモ (6/11, 11/5).

ウズグモ科：ヤマウズグモ (6/11).

タナグモ科：クサグモ (6/11, 11/5), コクサグモ (6/11, 11/5).

キシダグモ科：イオウイロハシリグモ (11/5).

コモリグモ科：ヤマハリゲコモリグモ♀♂ (6/11, 11/5).

カニグモ科：コハナグモ♂ (6/11), ハナグモ (6/11), ワカバグモ (11/5), ヤミイロカニグモ (6/11), カニグモ属の一種 y (11/5).

ハエトリグモ科：アリグモ (11/5), アオオビハエトリ (6/11).

参考文献

小野展嗣 (編) 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 秦野.

谷川明男 2020. 日本産クモ類目録 ver. 2020R3. Kishidaia, 117: 162–238.

滋賀県甲賀市におけるカトウツケオグモの記録

河瀬直幹

カトウツケオグモは、本州、四国、九州、南西諸島に分布し、里山～山地に生息するものの、個体数は極めて少なく、稀少種とされる（新海 2006）。滋賀県では長浜市西浅井町の山門水源の森、大津市の龍谷大学瀬田キャンパスの2か所で3例の記録があるのみである（吉田 2021）。今回、筆者が勤務している滋賀県甲賀市のみなくち子どもの森の園内でカトウツケオグモを目撃、撮影したので報告する。

【データ】

1 雌, 滋賀県甲賀市水口町北内貴(みなくち子どもの森) <34°57'25"N 136°10'11"E>, 2021年8月19日・22日・24日, 河瀬直幹撮影。

【確認状況】

朝に公園内の点検, 巡回をしていたところ, 8月19日, 22日, 24日の3日間にわたり, みなくち子どもの森昆虫広場に生育するヤマハギのほぼ同じ付近の葉先に止まっているカトウツケオグモの雌(状況から3日間とも同個体と考えられる)を観察, 撮影することができた(図1-3)。ヤマハギの花に飛来する訪花昆虫類を狙っていた可能性がある。8月19日にいた葉(図1)と22日と24日にいた葉(図2-3)はやや異なる位置にあった。22日と24日にいた葉の表面には糸が張られており, 台座のようになっている。同じ葉に長く滞在するために張られた可能性がある。

今回の記録は滋賀県内で3か所目の分布地となる。みなくち子どもの森の園内は, かつての地域の里山を公園として整備した環境である。本種を確認した広場にはエノキやムクノキ, クヌギなどの高木, ノリウツギ, ドウダンツツジ, ヤマハギなどの灌木が自生もしくは植栽されている。草本植生としては, 年数回の草刈りがなされることから, イネ科のナガハグサが優占し, スズメノヤリ, カンサイタンポポ, カタバミ, アリアケスミレ, ゲンノショウコなどが見られる。隣接して水辺ビオトープがあり, 水際はミゾソバ群落に覆われていた。全国的な稀少種とされる本種にとって, どのような環境が重要なのか興味もたれる。

謝辞

カトウツケオグモの同定確認をいただいた吉田真先生に感謝申し上げます。

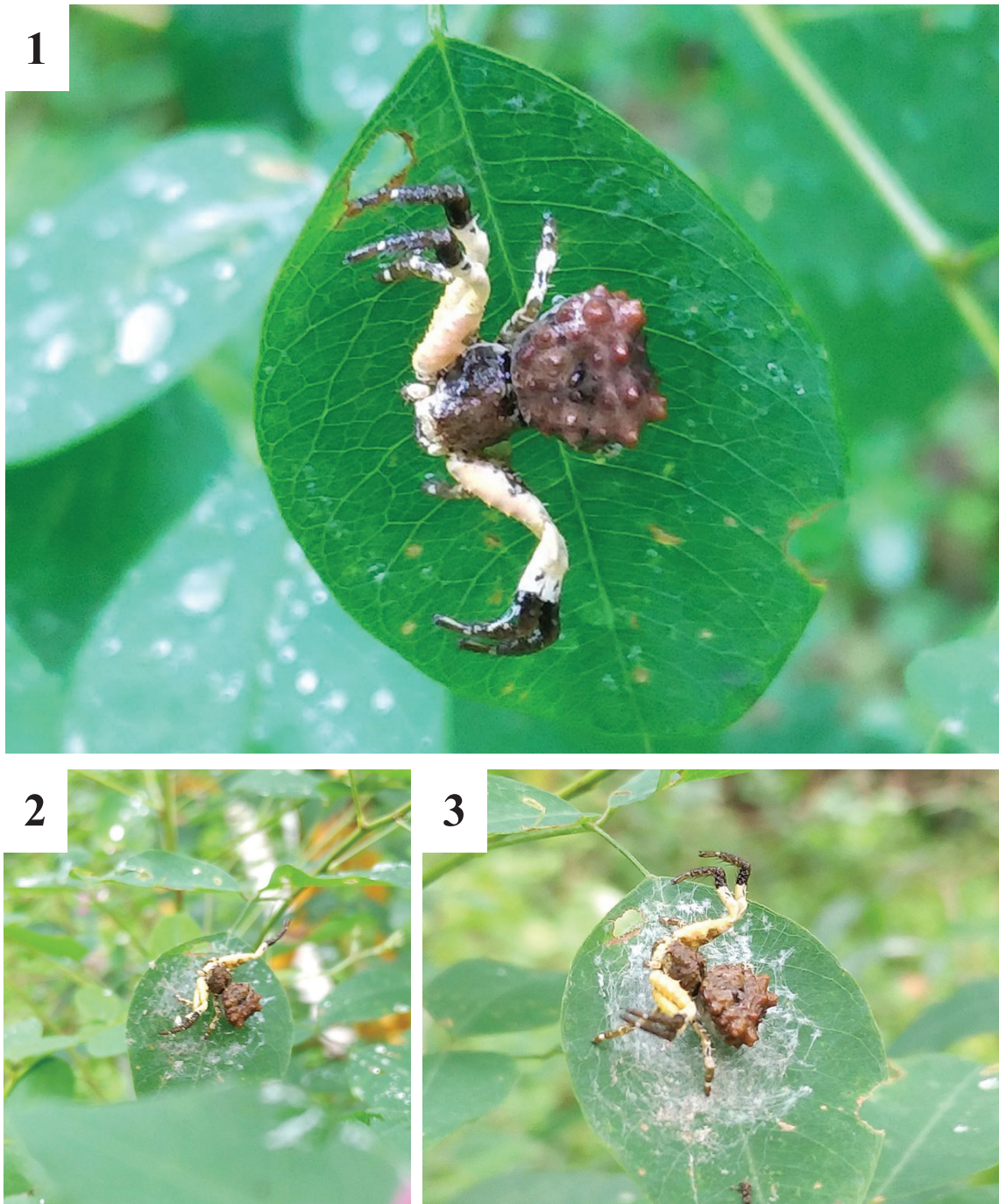


図 1-3. ヤマハギの葉で見られたカトウツケオグモ雌. 1, 8月19日 ; 2, 8月22日 ; 3, 8月24日.

引用文献

- 新海栄一 2017. ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.
吉田真 2021. カトウツケオグモ. P. 552. In: 滋賀県生きもの総合調査委員会 (編), 滋賀県で大切にすべき野生生物—滋賀県レッドデータブック 2020 年版—, 滋賀県自然環境保全課, 大津.

12月まで長生きしたコガネグモおよびナガコガネグモ

野口 大介

Long-lived individuals of *Argiope amoena* and *A. bruennichi*
survived until December

Daisuke Noguchi

In 2021, individuals of *Argiope amoena* and *A. bruennichi* (Araneae: Araneidae) that survived until December were observed in Nagasaki.

長崎市文教町において、2021年12月1日の朝、前日からの強風、雨、寒気の影響のためか、それまでは網上にいたコガネグモ *Argiope amoena* が、網を離れ、コンクリート壁に逃れていた（図1）。翌日の昼間もコンクリート壁にいたが、夕方に造網を始め、翌3日朝に網を完成させていた。同月9日には網を壊し、翌10日以降は姿が見えなくなった。



図1. コガネグモ（長崎市文教町で2021年12月1日の朝に撮影）。

コガネグモ成虫の出現時期は5~9月で(小野・緒方 2018), 12月における生息は, 以前にも報告されている(鈴木 2019). 本種は, 地域によっては準絶滅危惧種に選定されており, その生態に関する本知見が, 今後の保全を検討する上で役立てば, と思う.

同じく2021年12月1日, このコガネグモの生息地点から10mほどの場所で, ナガコガネグモ *Argiope bruennichi* が, 網上にいた(図2). 翌2日の夕方に網を壊して下草に降りているのを確認し, 翌3日以降は姿が見えなくなった. ナガコガネグモ成虫の出現時期は7~11月とされる(小野・緒方 2018). 12月におけるナガコガネグモの生息を確認したのは, 2019年, 2020年に引き続き(野口 2020, 2021), これで3年連続となった.



図2. ナガコガネグモ (長崎市文教町で2021年12月1日の朝に撮影).

引用文献

- 野口大介 2020. 長崎における秋から冬にかけてのクモの生態とチュウガタシロカネグモの UV-vis 反射スペクトル測定. 日本科学教育学会研究会研究報告, 34(7): 33-38.
- 野口大介 2021. 2020年に長崎県で見つけたクモの覚え書き. くものいと, (54): 41-51.
- 小野展嗣・緒方清人 2018. 日本産クモ類生態図鑑 自然史と多様性. 東海大学出版会, 平塚, xiii+713 pp.
- 鈴木佑弥 2019. 季節外れのコガネグモ. Kishidaia, (114): 69.

「家蜘蛛」とはどんなクモか？

関根 幹夫

What kinds of spider species are "Ie-gumo"?

Mikio Sekine

はじめに

近年ネット上では、「家蜘蛛」という語が使われている。「家蜘蛛」とは、家の中に出現するクモのことを意味する語であり、辞書には掲載されていないが俗語として使われている。また、クモは虫を捕ってくれる益虫であるから「家蜘蛛は殺すな」との成句もネット上で目にする。このことは現代人の「クモ観」の一端を示す事例として興味深い。ところで、「家蜘蛛」とは具体的にどんなクモを指し示しているのかは明確ではなく、今までに「家蜘蛛」に関する報文もない。そこで、本研究では、「家蜘蛛」という語が指し示すクモが一般にどんなクモとして認識されているのかについて検討した。

方法

特定のキーワードが Google (グーグル) や Yahoo (ヤフー) などのサーチエンジンで検索された回数をサーチエンジンの検索数という。高田 (2021) は、検索数という指標は社会の世相や人々の精神活動の動向を定量的に示す指標となりうると指摘した。本研究では、高田 (2021) による文化昆虫学の客観的・定量的な研究手法として Google 検索数を指標とする方法を用いた。

「家蜘蛛」という語が現在どの程度検索されているのかを調べるため、株式会社ディーボが提供する「aramakijake.jp」(URL:<https://aramakijake.jp/> 2022 年 1 月 17 日参照) を用いて、「家蜘蛛」というキーワードの月間推定検索数を求めた。

検索数の変動と「家蜘蛛」という語がいつごろから検索されるようになったのかを調べるため、Google トレンド (URL:<https://trends.google.co.jp/trends/?geo=JP> 2022 年 1 月 17 日参照) により、「家蜘蛛」というキーワードの Google 検索数の 2021 年 1 年間の相対検索数の推移と、2004 年 1 月からの相対検索数の推移を調べた。

また、「家蜘蛛」という語の検索数が他の昆虫と比べて多いのか否かについて、生物学的な意味合いで関心を集めるだけでなく象徴的な意味合いなどからも関心を集めているとされる「ほたる」を検索語に選定し (Takada 2011)、「家蜘蛛」の検索数と比較した。これは、電子掲示板上で参加者同士が知識や知恵を教え合うナレッジコミュニティ、知識検索サービスである Yahoo! 知恵袋 (URL:<https://chiebukuro.yahoo.co.jp/> 2022 年 1 月 17 日参照) における「家蜘蛛」と「ほたる」の Q&A 数を調べるという方法により行った。

さらに、「家蜘蛛」という語が指し示すクモが一般にどのような種類のクモと認識されているのかを調べるため、Google 画像検索 (URL: <https://www.google.co.jp/imghp?hl=ja> 2022 年 1 月 17 日参照) を用いて、「家蜘蛛」というキーワードにより検索し、検索された上位 40 件の画像のクモの種類を同定し、頻度分布にまとめた。

結果

「家蜘蛛」というキーワードの月間推定検索数は、Yahoo!Japan で 1,980 件、Google で 7,920 件であった。Google 検索数の 2021 年 1 年間の相対検索数の推移を図 1 に示した。夏に検索数が多い傾向が見られた。また、Google 検索数の 2004 年 1 月からの相対検索数の推移を図 2 に示した。「家蜘蛛」という語は、2004 年にはすでに登場しており、2015 年頃から増加傾向にあることが分かった。

Yahoo!知恵袋の全ジャンルでの Q&A 数 146,033,356 件中、「家蜘蛛」で検索された Q&A 数は 19,443 件、「ほたる」で検索された Q&A 数は 48,306 件であり、「家蜘蛛」は「ほたる」の 40.2%であった。

また、Google 画像検索により「家蜘蛛」というキーワードで検索された上位 40 件の画像のクモの種類を同定結果を表 1 に示した。検索された合計 10 種類 (外国産の種とイラスト画を含む) のクモのうち、頻度が高かったのはアダンソンハエトリとアシダカグモであった。

表 1. Google 画像検索でキーワード「家蜘蛛」で検索された上位 40 件の画像のクモの種類を同定結果。

アダンソンハエトリ	15	37.5%
アシダカグモ	15	37.5%
チャスジハエトリ	2	5.0%
ミスジハエトリ	1	2.5%
マミジロハエトリ	1	2.5%
ハエトリグモ科	1	2.5%
イエユウレイグモ	2	5.0%
オニグモ属の一種	1	2.5%
外国産の種	1	2.5%
イラスト画	1	2.5%
計	40	

考察

表 1 より、「家蜘蛛」という言葉が指し示すクモは、一般的にはアダンソンハエトリとアシダカグモであることが示唆された。イエユウレイグモも建物内で見られるクモであるが、「家蜘蛛」を指し示すとは結論付けられないであろう。また、チャスジハ

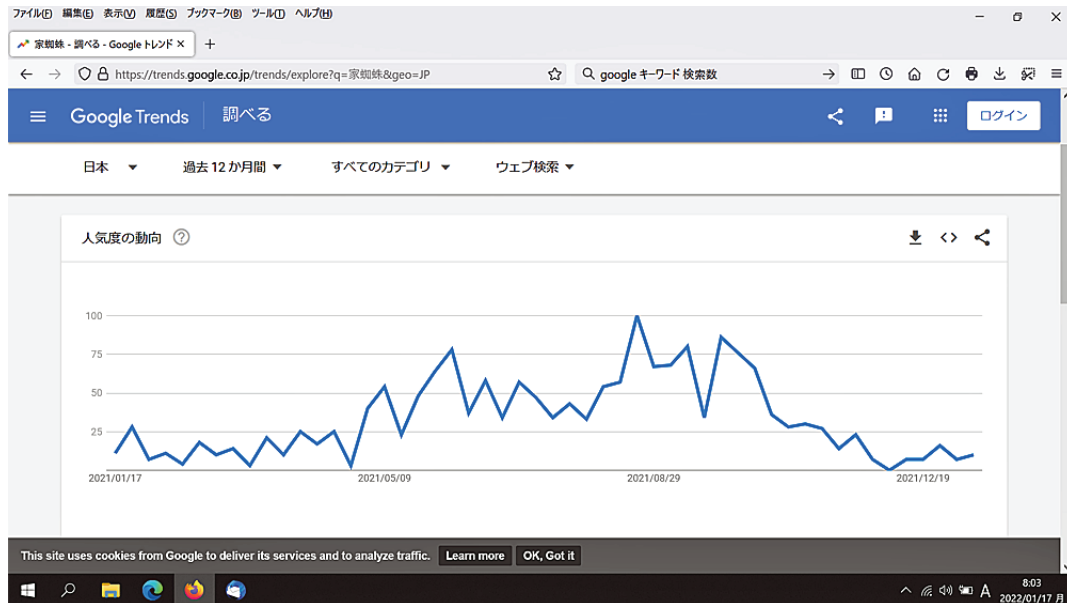


図 1. Google トレンドでキーワード「家蜘蛛」の検索数（相対値）の推移を調べた結果（2021 年）.

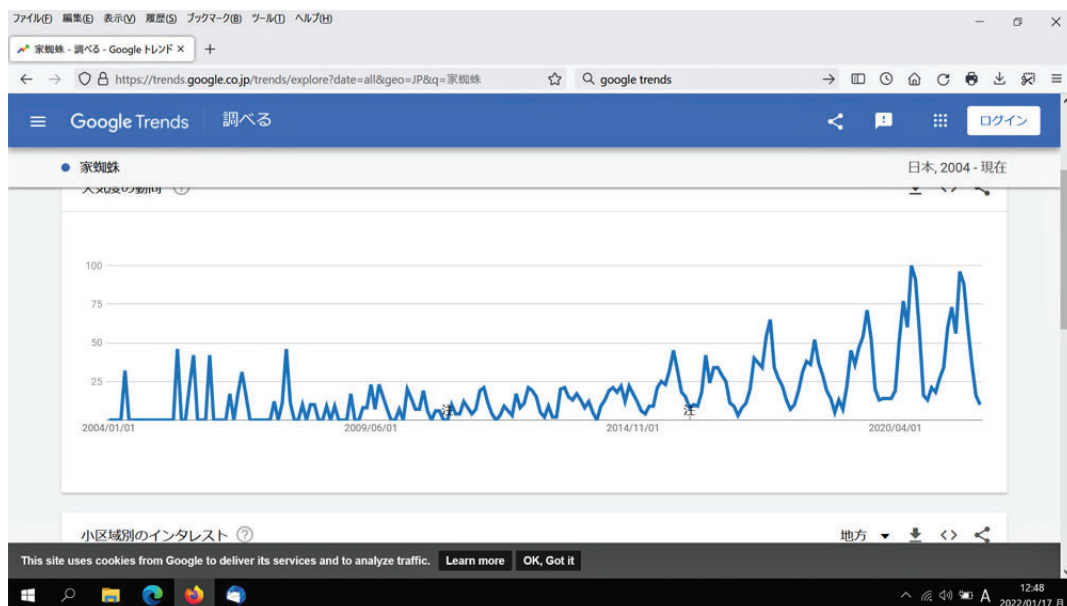


図 2. Google トレンドでキーワード「家蜘蛛」の検索数（相対値）の推移を調べた結果（2004-2021 年）.

エトリとミスジハエトリが「家蜘蛛」と認識されているかどうかについては検討が必要と思われる。

図 1 と図 2 より、「家蜘蛛」の検索数が夏に増えるのは、アダンソンハエトリの成体出現期が 6～8 月であることとアシダカグモの成体は一年中見られるが(新海 2017), 夏季に遭遇することが多いことによるものと考えられる。

Yahoo!知恵袋の Q&A 数で「家蜘蛛」が「ほたる」の 40.2%であることから、人々の「家蜘蛛」への関心は高いとみなすことができるだろう。また近年、「家蜘蛛」の検索

数が増加傾向にあることから（図 2）、「家蜘蛛」という言葉は定着しつつあることが示唆された。

引用文献

新海栄一 2017. 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

Takada, K. 2011. Popularity of different lampyrid species in Japanese culture as measured by Google search volume. *Insects*, 2(3): 336–342.

高田謙太 2021. 令和新時代の文化昆虫学. Pp. 261–277. In: 保科英人（編著）. 「文化昆虫学」の教科書. 八坂書房, 東京.

11 月から 12 月にかけてのシロブチサラグモの成虫の出現

岡田 純二

はじめに

シロブチサラグモは草原、河原、雑木林の周辺などの草間、樹木の枝葉間の低い場所に深いドーム網（直径 10~15 cm, 深さ 5~8 cm）を張り、その最盛期は 5~6 月（新海 2017）で、明るく開けた場所に多く、年 1 化性で成虫の出現期は 3~8 月（小野・緒方 2018）とされている。

2020 年 11 月に三重県名張市で、道路沿いの U 字溝内にシロブチサラグモが多くの網を張っているのを見つけた。ここで調査を行ったところ、2020 年 11 月 5 日にシロブチサラグモの成虫と思われる雌雄が同じ網の中にいるのを発見し、11 月 8 日交接が確認された。これは本種の活動時期に関する従来の知見とは異なるため、詳しく調べてみようと考え 2020 年と 2021 年に調査を行った。

方法

観察場所と観察日は以下のとおりである。

- ・地点 A. 名張市桔梗が丘 10 号公園外周道路沿いの U 字溝（3 か所、調査距離：各約 10 m）。2020 年 11 月 8 日~12 月 5 日。
- ・地点 B. 名張市桔梗が丘住宅地内空地横の U 字溝（1 か所、調査距離：約 14 m）。2020 年 11 月 10 日~12 月 5 日（午前 9:00~10:00 及び午後 13:00~14:00）。
- ・地点 C. 名張市桔梗が丘西徳明池横の U 字溝（1 か所、調査距離：約 24 m）。2021 年 11 月 26 日~12 月 24 日（午前 8:30~9:30 及び午後 13:00~14:00）。

いずれの U 字溝も、開けた草原に隣接した日当たりの良い場所にあり、その上幅は 30 cm である。また、溝の掃除があまり頻繁に行われず、人為的なかく乱が少ない場所を選んだ。観察に際しては、倍率が 6 倍で 50 cm まで近接が可能な双眼鏡を利用し、U 字溝を上から覗き込んで、同じ網の中にいる雄雌ペアのシロブチサラグモを探した。雄が触肢を外雌器へ挿入した後、触肢の膜質部が膨らむのが確認できた場合、あるいは、20 分以上交接を行った場合を交接として記録した。これは、数秒間の交接を行った雌を採集して（2021 年 11 月 21 日）確認したところ、採集脱皮直前の幼虫であることが分かったため、短時間の交接では偽交接の可能性があると考えたからである。また、地点 B と地点 C では、網の上で活動していた幼虫及び成虫の個体数を確認した。

結果

3 地点で得られた記録（交接を確認した日付とペア数、幼虫と成虫を合わせた個体数、採集した標本数）を以下に示す。

- ・地点 A. 交接：2020 年 11 月 8 日、11 月 17 日、11 月 18 日、各 1 組合計 3 組。個体数確認なし。標本の採集：2020 年 11 月 12 日（体長 1 mm, 2 mm, 3 mm の幼虫、

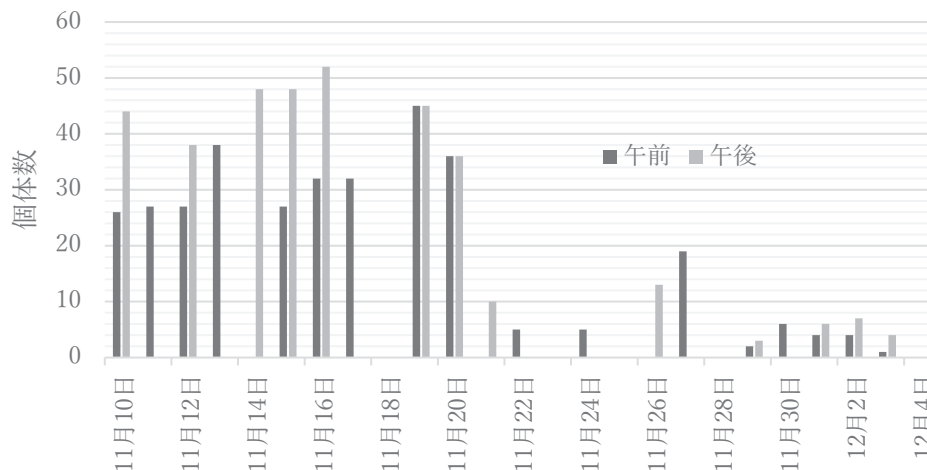


図 1. 地点 B における個体数の推移.

雄雌), 2021 年 11 月 21 日 (雄と成虫になる直前の幼虫).

- ・地点 B. 交接: 2020 年 11 月 18 日 1 組. 個体数の確認: 図 1 に示すとおり. 標本採集なし.
- ・地点 C. 交接: 2021 年 11 月 29 日 2 組, 11 月 30 日 1 組, 12 月 4 日 1 組, 12 月 11 日 3 組 (図 2), 合計 7 組. 個体数の確認: 図 3 に示すとおり. 標本採集: 2021 年 12 月 3 日 (1 mm, 2 mm の幼虫).



図 2. 交接するペア (地点 C, 2021 年 12 月 11 日).

考察

シロブチサラグモが 11 月から 12 月にかけて交接すること (2020 年 3 回, 2021 年 7 回) が観察された.

これは従来 of 知見 (新海 2017, 小野・緒方 2018) とは異なるものの, 今回の複数回の観察結果によって, 本種の成虫が 11 月から 12 月に活動することが確認されたと考えている.

今回の観察地点の U 字溝は明るく開けた草原に隣接していたところを選定したが, 地点 B では, 観察を始めた当初は U 字溝に日光がよく当たっていたものの, 時間の経過とともに, U 字溝周辺が近くの住宅の陰になり, 日当たりが悪くなってしまった. この場所で観察期間の後半で活動する個体数が減少し, 12 月 5 日にはまったく見られなくなったのは (図 1), この日照の減少が原因である可能性がある. 一方, ほぼ南北の道路で東側に開けた草原に接し, 観察終了時まで日陰にならなかった地点 C では, 12 月 23 日まで U 字溝内に網を張る個体が観察されている (図 3). このように, 地点 B と地点 C では, 観察場所の日当たりの条件が異なり, そのため, 観察された個体数が大きく異なっていると考えられ, この観察結果だけでは, シロブチサラグモの秋の活動のピークがどこにあるかの判断はできないと思われる. なお, 今回の観察結

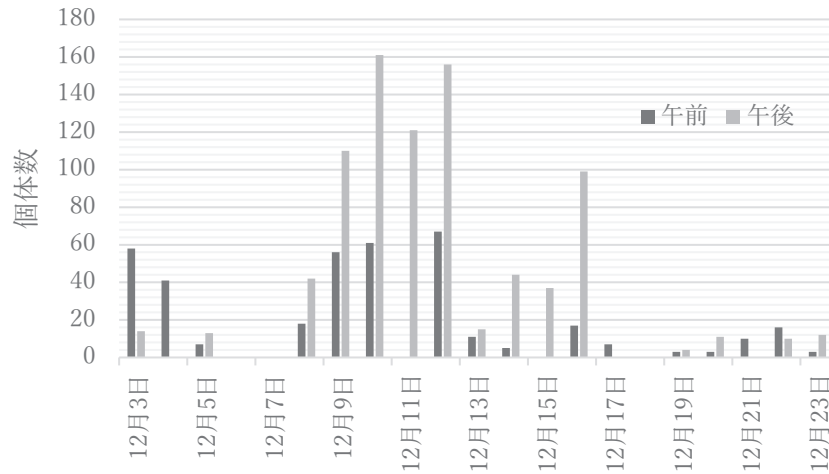


図 3. 地点 C における個体数の推移.

果以外に、網を張らずに枯れ葉の陰などに隠れていた本種の幼虫が、地点 A で 2021 年 12 月 28 日に 7 個体 (図 4)、地点 C で 2022 年 1 月 20 日、22 日、25 日に各 1 個体、網を張った幼虫が、観察地点 A で 2021 年 1 月 15 日に 2 個体、1 月 25 日に 4 個体見つかっている。

冬季に日当たりのよい U 字溝内で活動するクモはシロブチサラグモだけでなく、2021 年 1 月 25 日に三重県名張市内で、セアカゴケグモの幼虫が網の中で餌を食べるところ、雌が U 字溝の中に張られた網の中を早い速度で動き回っているところを見ている (岡田 2021)。今回の観察では、成虫出現時期や交接時期について文献とは異なる結果が得られたが、日照があれば冬でも温暖になるという特殊な環境の U 字溝内で観察を行ったことが原因の一つであると考えられる。

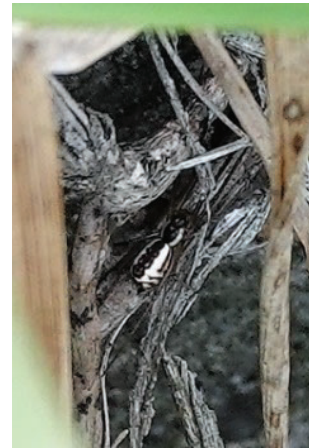


図 4. 枯葉の陰に隠れる個体 (地点 A, 2021 年 12 月 28 日)。

謝 辞

今回クモの生活史についてご教授、および草稿について助言を頂いた加村隆英先生、原口岳氏には厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 岡田純二 2021. 越冬中に活動するセアカゴケグモ. くものいと, 54: 56–57.
 小野展嗣・緒方清人 2018. 日本産クモ類生態図鑑. 東海大学出版部.
 新海栄一 2017. 日本のクモ. 文一総合出版.

多良間島（沖縄県）のクモ

加 村 隆 英

Spiders collected from Tarama-jima Is., Okinawa Pref., Japan

Takahide Kamura

沖縄県の多良間島は、先島諸島の宮古島と石垣島の上に位置する、東西約 5.8 km、南北約 4.3 km の小さな島である。筆者が今から 20 年前の 2002 年 3 月にこの島で採集したクモの同定結果を示す。新海ら（2020）のデータに照らして、この島の新記録と見なされる種にアスタリスクを付した。

Scytodidae ヤマシログモ科

**Scytodes fusca* Walckenaer 1837 クロヤマシログモ 2 幼体、塩川御嶽の西、10.III.2002. (図 1 A).

Pholcidae ユウレイグモ科

Smeringopus pallidus (Blackwall 1858) ユウレイグモモドキ 2♀、塩川御嶽の西、10.III. 2002.

Theridiidae ヒメグモ科

**Nihonhimea japonica* (Bosenberg & Strand 1906) ニホンヒメグモ 1♀、島の北部、12.III.2002.

Araneidae コガネグモ科

**Cyclosa confusa* Bosenberg & Strand 1906 ミナミノシマゴミグモ 1♀、前泊港の近く、10.III.2002; 3♀、島の北部、12.III.2002.

**Cyclosa mulmeinensis* (Thorell 1887) トゲゴミグモ 2♀、島の北部、12.III.2002.

Neoscona subpullata (Bosenberg & Strand 1906) ヘリジロオニグモ 3♀、島の北部、12.III.2002.

Neoscona theisi (Walckenaer 1842) ホシスジオニグモ 1♂3♀、島の北部、12.III.2002.

Tetragnathidae アシナガグモ科

**Leucauge blanda* (L. Koch 1878) チュウガタシロカネグモ 2♀、島の北部、12.III.2002.

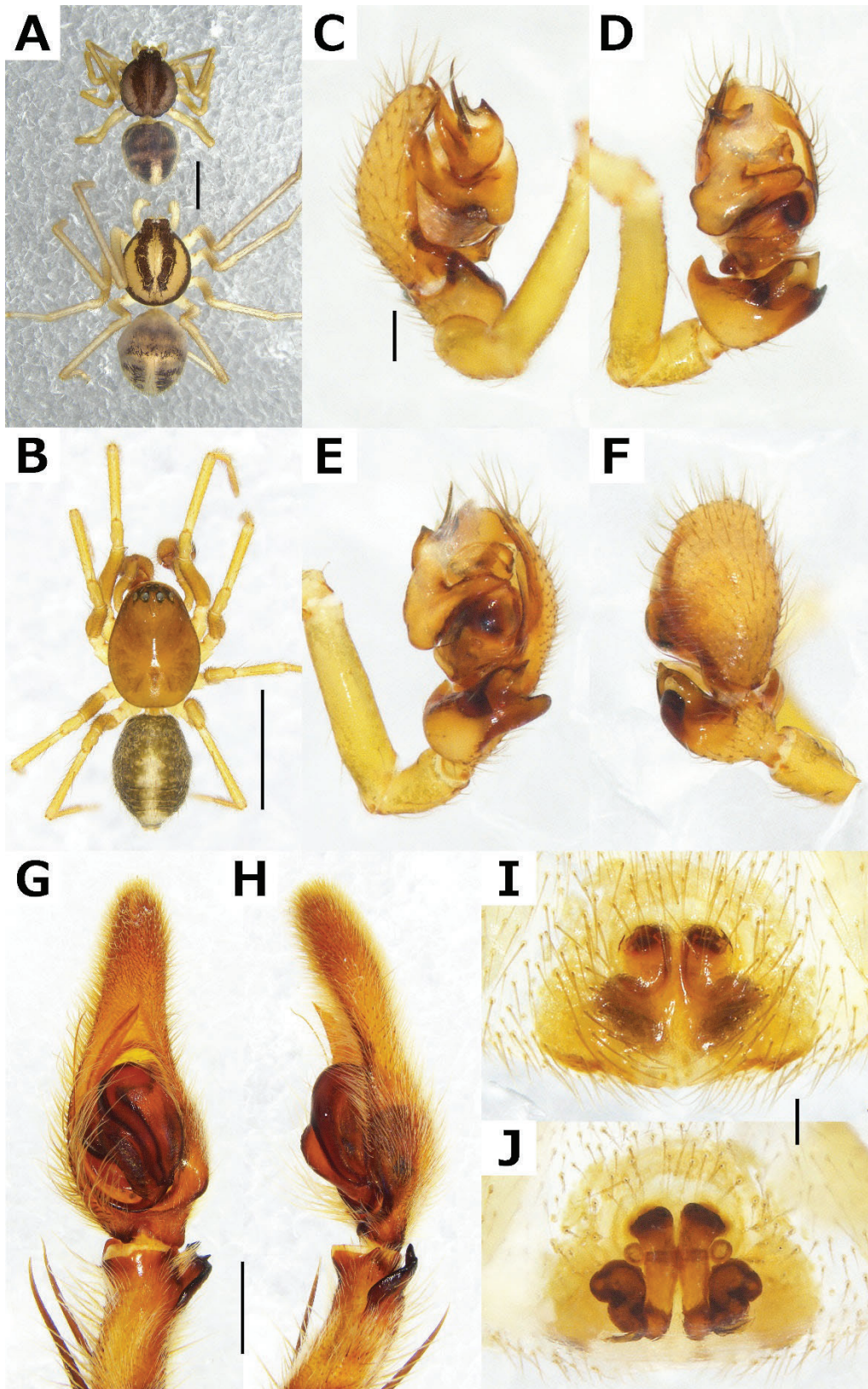


図1. 多良間島で採集されたクモ4種. A, *Scytodes fusca* クロヤマシログモ, 幼体; B-F, *Gongylidioides onoi* オノヌカグモ (B, 雄; C, 左雄触肢, 前側面; D, 同, 腹面; E, 同, 後側面; F, 同, 背面); G-H, *Heteropoda venatoria* アシダカグモ (G, 左雄触肢, 腹面; H, 同, 後側面); I-J, *Cladothela auster* ハエミノチャクロワシグモ (I, 外雌器, 腹面; J, 雌内部生殖器, 背面). スケール = 1 mm (A-B, G-H); 0.1 mm (C-F, I-J).

Linyphiidae サラグモ科

**Gongylidioides onoi* Tazoe 1994 オノヌカグモ 1♂, 前泊港の近く, 12.III.2002. (図 1 B–F).

Titanoecidae ヤマトガケジグモ科

**Nurscia albofasciata* (Strand 1907) ヤマトガケジグモ 1♂, 島の南部の浜, 11.III.2002.

Sparassidae アシダカグモ科

**Heteropoda venatoria* (Linnaeus 1767) アシダカグモ 1♂, 塩川御嶽の西, 10.III.2002. (図 1 G–H).

Lycosidae コモリグモ科

**Pardosa oriens* (Chamberlin 1924) ヒガシコモリグモ 2♂4♀, 前泊港の近く, 10.III.2002.

**Pardosa takahashii* (S. Saito 1936) スナハラコモリグモ 2♀, 島の南部の浜, 11.III.2002.

**Trochosa aquatica* Tanaka 1985 ナガズキンコモリグモ 1♂, 塩川御嶽の西, 10.III.2002.

Phrurolithidae ウラシマグモ科

Otacilia lynx (Kamura 1994) ヤマネコウラシマグモ 4♂7♀, 前泊港の近く, 10.III.2002 (1♂), 12.III.2002 (3♂7♀) [Kamura (2005) で報告済].

Gnaphosidae ワシグモ科

**Cladothela auster* Kamura 1997 ハエミノチャクロワシグモ 2♀, 前泊港の近く, 12.III.2002. (図 1 I–J).

Salticidae ハエトリグモ科

Hasarius adansoni (Audouin 1826) アダンソンハエトリ 1♂, 島の南部の浜, 11.III.2002.

文献

Kamura, T. 2005. Spiders of the genus *Otacilia* (Araneae: Corinnidae) from Japan. *Acta Arachnol.*, 53: 87–92.

新海明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生 2020. CD 日本のクモ ver. 2020. 著者自刊.

長野県で見つかったセアカゴケグモ

清水 裕行

1995年に大阪府高石市でセアカゴケグモが発見されて以来、日本列島各地でゴケグモ類の発見が相次ぎ、全国47都道府県のうちでゴケグモ類が未確認なのは青森・秋田両県だけとなった。筆者は20年来日本国内におけるゴケグモ類^(注1)の分布と駆除・研究活動、行政や報道の対応等に関する情報を収集し、その成果を研究誌やネット上^(注2)に適宜公開してきた。今回は全国で45番目にセアカゴケグモが確認された長野県の状況について報告したい。

1. 県内における発見状況

県内最初の発見は2019年8月8日に飯田市で、以降、2022年2月現在で4例が確認されている。概要を表1に示した。

表1. 長野県で確認されたセアカゴケグモのデータ。

発見年月日	発見地	個体数	新聞報道
① 2019年8月8日	飯田市北方	メス1 幼体20	8月10日付『信濃毎日』・『読売』, 11日付『朝日』
② 2019年12月20日	下伊那郡 松川町大島	メス1	12月26日付『信濃毎日』
③ 2020年10月5日	駒ヶ根市赤穂	メス1	10月7日付『信濃毎日』・『長野日報』・『読売』
④ 2021年10月22日	諏訪市中洲	メス1	10月23日付『信濃毎日』・『長野日報』, 24日付『毎日』

2. 生息状況

発見・駆除された個体はすべてメス1個体で、以後それぞれの場所からは続報がないので、一旦は根絶されたと言えそうである。ただし、松川町では同時に幼体20個体が確認されており、定着の懸念は残る^(注3)。

3. 行政の対応

当該自治体は

- (1) 各個体は駆除。
- (2) 被害報告はなし。

と発表している。また、各公式サイトで住民に注意をよびかけている。

[長野県]

<https://www.pref.nagano.lg.jp/shizenhogo/kurashi/shizen/hogo/seakagokegumo.html>

[飯田市]

<https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/19/seakagokegumo.html>

[諏訪市]

<https://www.city.suwa.lg.jp/soshiki/10/2122.html>

[松川町]

<https://www.town.matsukawa.lg.jp/soshikikarasagasu/juminzeimuka/kankyokakari/1/3/5251.html>

4. 新聞報道

地元紙の『信濃毎日新聞（信毎）』が全事例を報道した。同紙は県内全域を販売対象としている、「県紙」と呼ばれる地方紙である。なお、全国紙の毎日新聞社とは資本関係はない。同じく地方紙の『長野日報』は駒ヶ根市と諏訪市の事例を報じた。同紙は長野県の中で諏訪地方と上伊那地方を対象エリアとする「郷土紙」または「地域紙」と呼ばれるタイプの地方紙であり、表1の④の事例の諏訪市はそのお膝元と言える。

全国紙が長野県のケースを10数行で報じていたのに対して、両紙は最大60行前後で、諏訪市の事例以外では、カラー写真入りであった。このように、概して地元紙はニュースを詳しく報じる傾向があるので、情報収集する立場からは重宝な存在であるが、関西においては閲覧困難なケースも多い。『信毎』と『長野』は大阪の公共図書館で閲覧可能であるのだが、他にも数紙ある長野県内発行の郷土紙にまでは目をとおすことはできなかった。特に飯田市に本拠を構える『南信州新聞』が県南の事例をどう扱ったのかは興味深いので、機会があればぜひ確認したいものである。

5. 到達経路

ゴケグモ類の分布拡大は、基本的に人為分布によるもので、陸路では車両を介した場合が一般的と考えられる。従って、直前の生息地との距離は決定的なものとはならない。長野県のケースでは、東海地方だけでなく、近畿地方や関東地方、あるいは九州地方も十分に供給地の候補に含められる。

表1の①～③の3例では、発見地がみな県南の「下伊那地方」に属するので、あえて絞り込めば濃厚な分布を示す近隣の東海地方からの伝播である可能性が最も高いと言えそうである。④のケースもその延長と見られなくもない。一方、近年北陸地方における発見事例が目立っており（付録8・9を参照）、こちらとの関連も気になるところである。

(注1) 現在までに国内で確認されたゴケグモ属は以下の通りである。

- ①セアカゴケグモ *Latrodectus hasserti*
- ②ハイイロゴケグモ *L. geometricus*
- ③クロゴケグモ *L. mactans*
- ④ツヤクロゴケグモ *L. hesperus*

⑤アカオビゴケグモ *L. elegans*

(注2) 昆虫情報処理研究会のサイト「ゴケグモ情報センター」に収録

<https://www.insbase.ac/xoops2/modules/xpwiki/>

(注3) 卵嚢は未確認のようなので、車両あるいは運搬物資に造網・産卵したメスが幼体の一部とともに地上に落ちた可能性がある。

【付録】2021年のゴケグモ関係の新聞記事

2021年に新聞紙上に掲載されたゴケグモ関連記事を列挙する。

(1) 北海道および東北地方からの新聞記事は確認できなかった。また、ゴケグモ類の発見を報告する自治体サイトも見られなかった。ここ数年間は新たな生息情報が出ておらず、両地方では一旦根絶あるいは小康状態であると考えられる。

(2) 茨城県

① 2021年9月28日、神栖市でセアカゴケグモ。2021年9月21日付『朝日新聞』。

② 11月17日、龍ヶ崎市でセアカゴケグモ。同市初記録。11月19日付『茨城新聞』・『朝日』・『毎日』。

(3) 栃木県

① 8月18日、那須烏山市でセアカゴケグモ。同市初記録。8月21日付『読売新聞』。

(4) 群馬県

① 8月23日、みどり市でセアカゴケグモ。8月28日付『毎日新聞』。

(5) 千葉県

① 6月23日、袖ヶ浦市でセアカゴケグモ。6月26日付『読売』。

(6) 東京都

① 9月7日、墨田区の小学校でセアカゴケグモ。9月9日付『デイリースポーツ』・『毎日』・『産経新聞』。

(注) パラリンピック会場に貸し出した朝顔の鉢から見つかる。久しぶりにスポーツ新聞も掲載した。

(7) 神奈川県

① 7月15日、横浜市でセアカゴケグモ。7月17日付『神奈川新聞』。

(注) これまで同市では港湾施設からの発見であったが、今回は初めて市街地で確認された。

② 10月28日、大和市でハイイロゴケグモの卵嚢か。10月31日付『朝日』。

(8) 富山県

① 7月30日、富山市でセアカゴケグモ。7月31日付『北日本新聞』・『読売』。

② 8月17日、富山市でセアカゴケグモ。8月18日付『北日本』・『読売』。

③ 9月9日、富山市でセアカゴケグモ。9月10日付『北日本』・『読売』。

④ 7月から9月にかけて富山市で相次ぎセアカゴケグモ発見（特集）。9月19日付『北日本』。

⑤ 9月23日，富山市でセアカゴケグモ。9月25日付『北日本』・『読売』。

⑥ 10月14日，富山市でセアカゴケグモ。10月15日付『北日本』・『北国新聞』。

(9) 石川県

① 11月16日，金沢市でセアカゴケグモ。11月18日付『北国』，19日付『北陸中日新聞』・『読売』。

(10) 長野県

（注）長野県における発見情報に関しては，本編を参照されたい。

(11) 岐阜県

① 7月6日，各務原市でセアカゴケグモ。7月7日付『読売』。

② 7月14日，岐阜市でセアカゴケグモ。7月15日付『岐阜新聞』。

(12) 京都府

① 10月4日，舞鶴市でセアカゴケグモ。同市初記録。10月7日付『毎日』。

(13) 島根県

① 8月11・12日，浜田市でセアカゴケグモ。8月13日付『山陰中央新報』；15日付『読売』。

② 8月13日，浜田市で調査。8月14日付『山陰』。

(14) 山口県

① 2月17日，米軍岩国基地は当年第1回のゴケグモ類駆除実績を発表。2月18日付『山口新聞』。

② 7月8日，防府市でセアカゴケグモ。7月9日付『山口』。

③ 7月28日，下関市でセアカゴケグモ。7月30日付『山口』。

④ 8月18日，米軍岩国基地は当年第3回のゴケグモ類駆除実績を発表。8月19日付『山口』；20日付『毎日』。

(15) 徳島県

① 3月4日，鳴門市でセアカゴケグモ。3月5日付『徳島新聞』。

② 5月25日，鳴門市でセアカゴケグモ。5月27日付『徳島』。

③ 8月3日，小松島市と阿南市でセアカゴケグモ。8月4日付『徳島』。

④ 8月27日，鳴門市でセアカゴケグモ。8月28日付『徳島』。

⑤ 10月31日，鳴門市でセアカゴケグモ。11月3日付『徳島』。

(16) 香川県

① 1月21日，善通寺市でセアカゴケグモ。1月23日付『四国新聞』。

② 7月12日，善通寺市でセアカゴケグモ。7月13日付『四国』。

(17) 愛媛県

① 7月14日，新居浜市でセアカゴケグモ。7月16日付『愛媛新聞』。

② 11月4日，今治市でセアカゴケグモ。11月6日付『愛媛』。

③ 11月23日，今治市でセアカゴケグモ。11月25日付『愛媛』。

④ 11月29日, 今治市でセアカゴケグモ駆除研修会. 11月30日付『愛媛』.

(18) 福岡県

① 9月7日, 久留米市でセアカゴケグモ. 9月10日付『朝日』.

(19) 長崎県

① 3月29日, 五島市でセアカゴケグモ. 同市初記録. 3月31日付『長崎新聞』.

(20) 熊本県

① 6月12・14日, 熊本市でセアカゴケグモ. 6月15日付『熊本日日新聞』.

(21) 大分県

① 9月30日, 大分市でセアカゴケグモ. 10月2日付『大分合同新聞』・『朝日』・『読売』.

(22) 宮崎県

① 5月18日, 児湯郡高鍋町でハイイロゴケグモ. 同町初記録. 5月25日付『読売』, 26日付『朝日』.

② 9月から10月にかけて宮崎市内の約10ヶ所でハイイロゴケグモ. 10月12日付『夕刊デイリー新聞』; 19日付『読売』; 20日付『朝日』.

③ 11月に西都市・延岡市・東臼杵郡門川町でハイイロゴケグモ. 各市町初記録. 12月2日付『夕刊デイリー』; 8日付『朝日』.

(注)『夕刊デイリー新聞』は延岡市等, 宮崎県北部を対象とする夕刊紙. スポーツ紙である『デイリースポーツ』との関連はない.

以上. 1年間の全国的動向を実感していただけたならば幸いである.

コガネグモダマシは何時に網を張るのか

船 曳 和 代

はじめに

2006年4月23日(日)13時半ごろ、兵庫県姫路市夢前町山富へ網採集にでかけた。いつも歩くコースを一回りしたが採集できそうな網はなく、早々に切り上げ、川の反対側の草地を回って帰ることにした。ここは砂防ダムが作られたことによって出来た、ちょっとした草原である。小さな橋を渡ると枯れたススキやメリケンカルカヤの穂、ヨモギの今年の茎や穂、ハギの枝などが林立してまだ冬の色であった。

すぐにコガネグモダマシを見つけた。きれいな網だと思ったので採集しようとしたが、縦糸だけの作成中の網だった。周りを見ながら歩くと、たくさんの網が見つかった。どれも張りたてのようで破れがなく、寄生バチの幼虫をつけたクモが多かった。ざっと数えただけでも20を越した。ひと所でこんなにたくさんコガネグモダマシを見たのは初めてだったし、ハチの幼虫をつけたものを、こんなにたくさん見たのも初めてだった。

翌日、もう一度確かめたいと思って、ほぼ同時刻の14時過ぎに同じ場所へ見に行った。ところがなぜか1頭もいなかった。昨日網を張っていたと思われるススキの穂や、ハギの枝などをかき分けて探しまわったが、まったく見つけれない。昨日私は幻を見たのか、それとも夜にならないと出てこないのか、頭の中を？マーク一杯にして一旦家へ帰った。

コガネグモダマシについて「クモ生理生態事典」(池田 2020)で調べると「…中平氏によると、四国のものは夕方造網し、翌朝とりこわし葉の裏に潜むというが、東京では昼間も網を張っている…」と書かれていた。基本的には夜に網を張るクモなのだが昼間に張っていることもあるようだ。23日は前夜が雨、14時ごろは風もほとんどなく曇っていたので、日中から網を張っていたのかもしれない。24日はよく晴れて乾燥気味で風も強かったが、17時過ぎに再び同じ場所へ行くと、7~8頭のクモが網を張り始めていた。

いったいコガネグモダマシは何時ごろ網を張るのだろうか。時間をおいて同じ場所を3度回って観察した結果を以下に示す。

観察の記録

網の状態を以下のように3段階に分けて記録した。完成網：網が出来上がってクモが中心にいるもの、途中網：クモが縦糸や横糸張っている途中のもの、糸流し・橋糸：クモが出てきて網を張るため糸を流したり、橋糸をかけたりしている段階のもの。数字は観察された個体数を示す。また、寄生バチの幼虫がついている個体については、その数を内数として括弧内に示した。

*2006年4月29日 曇り時々晴れ (風強し).

・16時20分	完成網	・・・ 20	途中網	・・・ 6	糸流し・橋糸	・・・ 2
・16時50分	〃	・・・ 28	〃	・・・ 14	〃	・・・ 6
・17時20分	〃	・・・ 34	〃	・・・ 33	〃	・・・ 6

<17時30分時点の合計 ・・・ 73 (32)>

16時20分にはすでに20の網が完成し、他にも8頭が網を張り始めていた。

*2006年5月1日 晴れ (観察を始めたころには日が差していたが、17時前には全体が日陰になった).

・15時30分	完成網	・・・ 0	途中網	・・・ 1	糸流し・橋糸	・・・ 5 (2)
・16時30分	〃	・・・ 19 (7)	〃	・・・ 24 (8)	〃	・・・ 19 (3)
・17時30分	〃	・・・ 97 (38)	〃	・・・ 29 (6)	〃	・・・ 19 (7)

<17時30分時点の合計 ・・・ 145 (51)>

1回目の観察では全体で6頭のクモしか確認できなかったが、1時間後の2回目には62頭、3回目の17時30分には145頭と一気に増えた。一回りするのに1時間余りかかり、終わったのは18時半頃で辺りは薄暗くなっていた。

以後1週間あまりは、多忙で観察に行けなかった。その間に状況は大きく変わってしまった。寄生バチの幼虫はまだまだ小さいと思っていたのに急激に成長して蛹になったか、少なくとも蛹になる一步手前までいったらしい。

*2006年5月9日 曇り (朝7時ごろはげしく雨が降った).

・15時30分	完成網	・・・ 21 (2)	途中網	・・・ 3	糸流し・橋糸	・・・ 2
・16時30分	〃	・・・ 24 (9)	〃	・・・ 5	〃	・・・ 5
・17時30分	〃	・・・ 56 (9)	〃	・・・ 14	〃	・・・ 16

<17時30分時点の合計 ・・・ 86 (9)>

15時30分にはすでに21の網が完成していた。一方、17時30分時点で確認されたクモは86頭と、5月1日の半分近くまで減っていた。さらに寄生バチをつけたクモも51頭から9頭に激減していた。ただもっと遅い時間に出てくるのかもしれない。

*2006年5月11日

17時過ぎでもまったく見られず、18時過ぎになってようやく出てきはじめた。

それでは朝のコガネグモダマシの行動はどうなのだろう、何時頃まで網を張っているのだろうと思って何度か観察した。以下がその結果である。

*2006年5月14日 朝7時から9時まで観察。

・クモがいる網 ・・・ 39 (3)

・網はあるがクモがない網 …… 9(網のそばの枯れた茎にひそんでいるクモいたが、周辺に見つからないものもいた。)

クモがいるいないにかかわらず残っている網のほとんどが、張りたてと思えるほど破損の少ないものだった。昨夜は雨がかなりたくさん降ったために網を張る時間がずれたのかもしれない。

9時過ぎになると取り壊すものが出始めた。その様子を2例観察した。やり方は中心から外に向かって網の5分の1から6分の1ずつ手繰り寄せながら前進し、壊していった。クモは手繰り寄せた糸を食べた。食べる間を含め作業は数分で終了した。終わると粹糸をつけていたススキの茎伝いに足早に降りていき、株付近の枯葉が積もったあたりで姿がみえなくなった。別の一頭は茎の中間で止まり脚をピンと伸ばして止まった。ただ夕方網を張るまでこの状態であるかどうかは分からない。

*2006年5月18日

・11時 完成網 …… 4(1)

・17時30分 〃 …… 15(2) 途中網 …… 9(1) 糸流し・橋糸 …… 10

<17時30分時点の合計 …… 34(3)>

午前9時頃まで雨が降り、その後上がったものの一日中どんより曇っていた。午前と午後2度観察に行った。17時30分観察時点の網はさらに少なくなった。

*2006年5月20日

・17時30分 完成網 …… 4(1) 途中網 …… 5 糸流し・橋糸 …… 4

<17時30分時点の合計 …… 13(1)>

昨日から今朝まで雨が降っていた。寄生バチの幼虫をつけたクモはとうとう1頭になってしまった。

*2006年5月21日

・5時30分 完成網 …… 16(クモ在15, 不在1)

昨夕17時半の観察で見られたクモが少なかったのもっと遅く出てくるのかもしれないと思い、翌朝早く見に行った。昨夕とほぼ同じ数であった。クモ自体が産卵を終えて姿を消しているのだろう。

*2006年5月25日

観察最終日、17時半ごろ草原を見て回ったが、クモは1頭も見つからなかった。18時を少し過ぎるあたりからススキの穂先に止まっているものが現れた。

おわりに

以上がコガネグモダマシは何時に網を張っているのかを2006年4月23日から5月25日まで、何度か観察した記録である。基本的には夕方から網を張り、朝には取り壊

すクモだと分かった。ただ、条件が整えば日中でも網を張っているようだ。その条件が何なのかは分からない。最初にコガネグモダマシを見つけた日のように昼間からたくさん張っている日もあれば、今日は見られそうだと思っても、まったく見つからない日もあった。

時刻の決まる条件はいろいろ考えられる。その日だけでなく、前夜の気温、湿度、雨、風、クモの成長段階、日の出、日の入りの時刻、様々なものが複雑にからまりあっているのだろう。

観察で一番不思議だったのは、寄生バチの幼虫をつけたクモがどうなってしまったかということだ。多分最後は幼虫に食べられ、幼虫は蛹になったのだと思う。しかし、その蛹がいくら探しても見つからない。一番多く見た日には51頭もいたのだから一つくらい見つかってもよさそうなものである。梶元敏也氏によると、寄生バチの幼虫を飼育すると7~8mmの白いタイ米のような蛹になり、簡単な迷網内に吊るすそうである。しかし、自然状態ではまったく見つけれなかった。後日確かめたいと思っていたがそのままになり、15年も経ってしまった。

今回「くものいと」に投稿するにあたり、梶元敏也、智子夫妻にはいろいろな面でお世話になった。感謝申し上げます。

参考文献

池田博明 2020. クモ生理生態事典. <http://spider.art.coocan.jp/studycenter/Dic11.html>



図1. コガネグモダマシ. 上, ヨモギの枯れた枝にいる個体. 下, 寄生バチの幼虫をつけた個体. (いずれも梶元智子氏提供)

産卵を2回行うジョロウグモはどれくらいいるか (兵庫県姫路市における2015年の調査)

船 曳 和 代

はじめに

ジョロウグモの複数回産卵について、沖縄では一部で見られるものの、本州では産卵は原則的に1回と考えられてきた。しかし、大阪府堺市で14年間野外観察を行ってきた西野(2007)は、雌個体のうち、2回産卵した個体が4.5%と少数だが存在したことを報告している。最近では地球温暖化の影響で気温上昇が続いており、以前は南にいたクモが北へ分布を拡大させているという話も聞く。大阪より90km余り西にあたる姫路ではどうなのか。

今回は、川沿いに植栽された桜並木という比較的餌条件の良いと思われる環境で、複数回産卵しているジョロウグモがどれくらいいるのかを調べた。また、2回目の産卵が行われた場合は、初回の産卵日から2回目の産卵までにかかる日数や卵塊の大きさの計測、初回産卵木と2回目産卵木についての位置関係などを調べた。

調査場所と方法

兵庫県姫路市を流れる夢前川沿いでは、土手に桜の木が植えられており、春には美しい花を咲かせてくれる。そこでは毎年多くのジョロウグモが網を張り、産卵して命をつないでいる。今回はその一部分、川の西側、新書写橋から南へ300mの間(地名は姫路市書写)にある桜の木、60本について調べた(図1)。木は数m間隔でおよそ40年前に植栽され、幹の周囲は1m前後、高さは7~8mあり、よく茂っていて、上部では隣の枝同士が交錯している。下は草地で年2回、夏と秋に草刈が行われる。

この60本の木に1から60まで番号を振り、2015年10月10日から2016年1月5日まで、毎日1回(時間は不定)見てまわり、新しく作られた卵のうを記録した。また10



図1. 観察場所。姫路市夢前川沿いの桜並木。



図2. マニキュアで印(腹背右上と右第3,4脚に赤印)を付けた個体と卵のう。

月 13 日から 11 月 11 日の間に産卵した個体のうち、観察した時点で卵のうの上に滞在し、かつ手が届くおよそ 2m 以内のものについてマニキュアで印を付け、写真を撮った (図 2)。後日、印の付いた個体が産卵すると再度写真を撮り、以前撮った写真と照合して初回産卵日や産卵木を特定した。卵塊の大きさは卵のうに上から触れ、長径 × 短径をノギスで測定した。ただし、10 月 19 日から 23 日の 5 日間に印をつけた 10 頭の個体は、水性の絵の具を使用したため途中で印が取れてしまったようなので、印を付けなかったものとして記録した。また、11 月 5 日は旅行のため調査できなかったため、翌 6 日に 2 日分を記録した。

表 1. ジョロウグモの卵のう数 (2015 年 10–12 月)。日ごとに確認された卵のう数を示す。印無：雌に印を付けることができなかったもの；印付：雌に印を付けたもの；2 回目：2 回目の産卵として確認されたもの。

10月					11月					12月				
日	印無	印付	2 回目	合計	日	印無	印付	2 回目	合計	日	印無	印付	2 回目	合計
1					1					1	3			3
2					2	4	6		10	2				
3					3	4	4		8	3	17		6	23
4					4	3	4		7	4				
5					5					5				
6					6	6	12		18	6				
7					7	7	7		14	7	2			2
8					8	4	6	1	11	8				
9					9	1	6		7	9	1			1
10					10	1	4		5	10	1		1	2
11					11		2		2	11	10		3	13
12					12	1			1	12			2	2
13		1		1	13	5			5	13	1			1
14					14	5			5	14	1			1
15					15	9			9	15	3			3
16					16	6			6	16	2		7	9
17					17	5			5	17			1	1
18					18	8			8	18				
19	3			3	19	1			1	19				
20	2			2	20	5		2	7	20				
21	5			5	21	10		5	15	21				
22	6			6	22	2		2	4	22	2			2
23	4			4	23	5		2	7	23				
24	5	9		14	24	4		2	6	24	1		1	2
25	5	4		9	25					25	1			1
26	2	2		4	26	5		2	7	26				
27	4	7		11	27					27				
28	3	15		18	28	2			2	28				
29	5	6		11	29					29				
30	7	11		18	30	1			1	30				
31	3	7		10						31				
合計	54	62		116	合計	104	51	16	171	合計	45		21	66
全合計											203	113	37	353

結果と考察

産卵は10月13日の1頭が突出して早く、次は6日後の19日で、11月24日までほぼ毎日続いた。以降は途切れながらも続き、12月25日が最終であった。10月中に産

卵した個体は116頭、11月中は171頭、12月中は66頭で、全体で353個の卵のうを確認した(表1)。卵のうは17番の木に立てかけられていた石碑に産卵されていた1個以外は、すべて幹や枝に産み付けられていた。例年なら葉に産み付けられた卵のうもあったのだろうが、2015年は確認できなかった。原因は8月に大発生したモンクロシヤチホコの幼虫によって葉が食べつくされ、すべての木が丸坊主状態であったためと考えられる。

初回産卵の始まった10月13日から11月11日の間に、初回産卵した197頭の6割弱の113頭に印を付けることができた。このうち2回目の産卵をしたのは37頭、率にしておよそ32.7%であった。もし197頭全部に印をつけることができていれば、2回目の産卵をした個体は64頭と推計される。この数は初回産卵を記録した316頭全体のおよそ20.3%になり、かなり高いという感触を得た。

2回目の産卵は、11月が16頭、12月が21頭と半分以上が12月に入ってからだった。気象庁が発表している姫路市の過去の気象データをみると、2015年は12月の気温が異常に高かった。前年の平均気温より3度以上、過去5年と比較しても2度以上は高い(表2)。この高温が12月に入ってから産卵、ひいては2回目の産卵の増加につながったのではないだろうか。

次に、初回と2回目の両方の産卵を確認できた個体について検討する(表3)。37頭のうち6頭は2回目の卵のうが高い所につけられていたり、写真と照合しても一致する個体がいなかったりして、初回産卵日や木の番号を特定できなかった。残りの31頭については、初回産卵日から2回目の産卵日までにかかった日数の平均は32.2日であった。そのうち、10月中に初回産卵した個体は17頭で、2回目の産卵までに平均29.1日かかっていた。また、11月に初回産卵した14頭では平均36.0日で、10月より7日ほど長かった。興味深いのは、2回目産卵までに25日しかかからない個体がいる一方、57日もかかった個体があったことだ。この産卵間隔の長かった個体は、初回産卵日が10月28日と比較的早く、本来なら11月中に2回目の産卵を終えていると思われる。ところが、実際は12月24日と遅く、卵塊は小さかった(7.7 mm × 5.2 mm)。長くかかった原因は分からない。

卵塊の大きさを、初回、2回目ともに測れたものは23個あった。初回産卵では最大が20.6 mm × 12.4 mm、最少が11.1 mm × 8 mm、平均は16.1 mm × 10.7 mmであった。2回目の産卵になると最大が16.8 mm × 13.2 mm、最少は6.0 mm × 5.2 mm、平均は10.7 mm × 8.1 mmであり、初回産卵に比べると全体的に小さくなっていた。数mmしかない卵塊には、いったい何粒の卵が入っているのか、それらは正常に孵化するのか興味

表2. 兵庫県姫路市における2010–2015年の12月の平均気温(気象庁気象データによる)。

年	2010	2011	2012	2013	2014	2015
気温(°C)	6.8	6.2	4.8	5.9	4.9	8.3

表 3. ジョロウグモの初回産卵と 2 回目産卵の記録 (2015 年).

	初回産卵				2 回目産卵					初回産卵から 2 回 目の産卵 までの日数
	木の番号	産卵日	卵塊の大きさ (mm)	雌の卵のう での 滞在日数	木の番号	産卵日	卵塊の大きさ (mm)	雌の卵のう での 滞在日数	雌の滞在終了 の原因	
1	2	10月30日	15.2 × 10.1	4	3	12月3日	9.1 × 8.7	1	行方不明	34
2		特定できず			8	12月11日		4	行方不明	—
3	11	10月27日		1	10	11月21日		2	行方不明	25
4		特定できず			12	12月3日		25	死亡	—
5		特定できず			12	12月11日		17	死亡	—
6	14	11月3日	16.4 × 11.4	3	16	12月3日	11.2 × 8.8	23	行方不明	30
7	17	11月9日	15.1 × 11.4	3	16	12月17日	15.1 × 9.6	4	行方不明	38
8		特定できず			18	11月20日		1	行方不明	—
9	21	10月30日		2	20	11月26日		6	行方不明	27
10		特定できず			23	12月10日		18	死亡	—
11	22	11月2日	12.1 × 9.3	3	24	12月3日	8.6 × 8.7	2	行方不明	31
12	27	11月8日		1	25	12月12日		12	行方不明	34
13	28	11月8日	16.2 × 9.8	1	27	12月16日	9.5 × 7.4	11	行方不明	38
14	28	11月4日		3	27	12月16日		7	死亡	42
15	30	11月8日	20.6 × 12.4	1	28	12月11日	10.9 × 8.2	10	行方不明	33
16	29	11月7日	20.5 × 11.0	2	29	12月12日	12.4 × 8.1	9	行方不明	35
17	29	10月27日	18.9 × 12.2	2	30	11月24日	12.1 × 7.4	17	行方不明	28
18	28	11月7日	14.8 × 9.3	2	31	12月16日	6.3 × 6.0	22	死亡	39
19	32	10月31日	15.8 × 11.0	4	32	12月3日	16.0 × 9.6	4	行方不明	33
20	36	10月24日	15.0 × 13.3	2	36	11月21日	6.0 × 5.2	3	死亡	28
21	38	11月8日	13.8 × 10.9	2	36	12月16日	13.0 × 8.4	6	行方不明	38
22	39	11月6日	14.1 × 11.0	1	38	12月16日	7.1 × 5.7	14	死亡	40
23	36	10月28日		1	39	11月23日		18	行方不明	26
24	39	11月3日	17.9 × 11.7	2	39	12月3日	13.9 × 9.2	12	死亡	30
25	48	10月24日	15.6 × 8.3	4	46	11月20日	11.5 × 8.6	3	行方不明	27
26	47	10月28日	14.2 × 14.0	2	47	11月22日	14.3 × 11.5	3	行方不明	25
27	47	10月30日	11.1 × 8.0	2	47	11月26日	8.9 × 6.4	8	行方不明	27
28	46	11月9日	20.0 × 10.2	4	47	12月16日	7.4 × 6.3	11	死亡	37
29	48	10月24日	14.8 × 9.7	4	48	11月20日	9.2 × 7.7	3	行方不明	27
30	48	10月27日		1	48	11月21日		3	行方不明	25
31		特定できず			49	11月21日		3	死亡	—
32	48	10月28日		2	49	11月21日		5	行方不明	24
33	52	10月28日	15.9 × 11.2	2	50	12月24日	7.7 × 5.2	2	行方不明	57
34	52	11月7日	16.5 × 8.5	3	51	12月16日	9.2 × 8.2	3	行方不明	39
35	54	10月24日		3	55	11月22日		3	死亡	29
36	55	10月27日	17.6 × 9.5	3	55	11月23日	10.6 × 8.8	4	死亡	27
37	59	10月13日	19.3 × 11.3	1	59	11月8日	16.8 × 13.2	4	行方不明	26

を持ったが調べていない。

産卵木について見ると、初回、2 回目とも同じ木に産み付けたものが 10 頭、隣の木が 12 頭、1 本おいて隣の木が 7 頭、2 本おいて隣が 2 頭であった。すなわち、2 回目の産卵は、9 割以上が初回と同じ木か隣の木、もしくは 1 本置いて隣の木という近距離になっていた。

今後の課題

印をつけたクモは、観察した時点で卵のうの上にいる個体である。産卵は夜間に行われ、産卵後、時間をおかずに卵のうから離れてしまう個体もいるようで、1 割ほどはなくなっていた。できるだけ朝早くから観察すべきだと思った。

今回 10 月 19 日から 23 日までに産卵した個体には、水性のトゥールペイント用の絵

の具で印をつけてしまった。24日からはマニキュアに替えたが、それまでにつけた印は消えてしまったらしく、2回目の産卵は確認できなかった。10月13日に一番早く初回産卵した個体が2回目の産卵をしたのは11月8日と早い（この1個体のみ別な方法でマークしていた）。そこから次の産卵が確認される20日まで10日余りも開いている。きちんとマーキングできていれば、この間に何頭かが2回目の産卵していた可能性があり、最初からマニキュアにすべきだったと反省している。しかし、マニキュアに替えたあとも、特定できない個体はいくつかあった。写真と照合しても合う模様がなく、一部が取れたようだった。今回は赤、青、桃の3色を使ったが、色を増やしたり、2色を組み合わせていたりして工夫する必要がある。

初回産卵した個体のマーキングは、当初11月15日までやる予定だった。これは初回産卵を11月前半までに終えなければ、2回目の産卵はできないと判断したためである。ところが、11月12、13日は、たまたま手の届く範囲のものがなく、14日以降はとても寒くなったのでそのまま止めてしまった。結果的に11月11日という半端な日付で止めたことになり、これでよかったのかどうか分からない。

2015年の観察結果では2回目の産卵をする個体が結構多い感触を得た。これは12月中の気温が例年になく高く、産卵しやすい状況にあったためではないかと思われる。では、気温の低い年にはどうなるのか、気温の変化をどの程度受けるのか、来年も観察を続けたいと思った。

その他観察中に印象に残ったこと

【すごい生命力】

11月も後半になると1日の平均気温が10℃を切る日が多くなる。昼間見て回ると、前もって網を離れたクモが、産卵場所を求めて歩き回ったり、幹や枝のひと所にじっとしていたりする姿をよく見かける。静止していたクモは翌日に産卵していることもあるが、夜の気温が低いなど条件が整わないと、何日か同じような場所に静止して過ごす。

11月25日、網を離れて幹の上で静止しているクモがいた（図3）。背中には桃色の印がある。調べてみると、11月9日に初回の産卵を終えていた。この時点ですでに左脚1、2脚を失っていたが、さらに右脚1本を失い、左脚は1本しか残っていなかった。果たしてこんな体で正常な産卵ができるのだろうか、と危ぶんで見守っていた。クモはなかなか産卵しない。気温は低い日が続き、みぞれ交じりの風が吹きつける日もあったが、ひたすら耐えるように身じろぎもしない。死んでしまったのかと心配にな



図3. 2回産卵し、12月27日まで生きた個体。

って背中に軽く触れると小さく脚を動かす。日によっては10 cm ほど動いていることもあるが、ほぼ同じところに留まっていた。そして21日後の12月16日にやっと産卵した。卵のうは7.4 mm × 6.3 mm と小さかったものの、卵の上にはきちんと糸がかけられていた。その後も卵のうの上で11日間生き続け、12月27日に死亡した。網を離れてから32日間、餌も取らずに産卵という大役を果たして生き続けたことになる。すごい生命力である。

【共喰いするクモ】

11月に入ってしばらくすると、ジョロウグモがジョロウグモを食べている姿をちょくちょく見かけるようになった(図4)。特に注意して観察し、目撃したものをすべて記録したわけでもないが、少なくとも7頭のクモが共喰いしていた。この時期、産卵場所を求めて徘徊するクモや、逆に産卵を終えて元の網に戻ろうとしたり、新しい網を張る場所を求めたりして移動するクモが増える。幹や枝の上では、ニアミスや別の網への侵入ということが起こりやすい状況にあり、喰ったり喰われたりする関係が生まれるのではないかと思われる。大型の昆虫はほぼいなくなり、小型の虫も少なくなる時期だ。もしかして仲間のクモは最大の栄養補給源なのかもしれない。実際食っている姿を目撃した翌日に産卵したクモや、食ったと思われるジョロウグモの亡骸を付けた卵のうもあった。

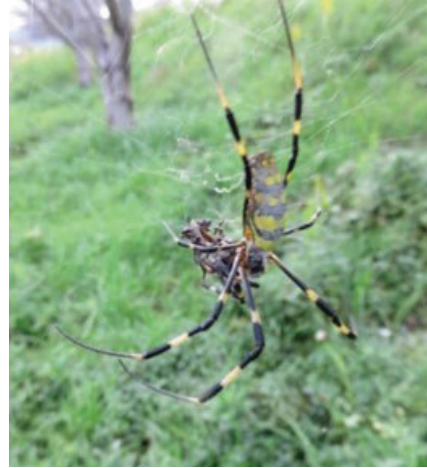


図4. 共喰いするジョロウグモ。

【途中で中止や変更はできない?】

11月1日は午後10時ごろから雨が降り出し、2日の午前中にかけて降り続いた。激しい雨ではなかったものの結構雨足が強まる時間帯もあった。「こんな日に産卵したクモはいないだろう、でも念のため」と思って11時すぎ、傘をさして見て回った。ところがなんと10頭ものクモが産卵し、卵塊の上で懸命に糸をかけていた。通常ならすでに終わっている時間帯である。脚や糸に水滴がつき、作業がやりにくいのか遅れがちで、まだ赤みがかかった卵塊が透けて見えるものが多かった。中に少し様子が違うクモがいた。かけている糸の下にあるべき卵塊が見当たらない。卵塊の半分は幹を伝って10 cm ほど下に流れ落ち、残りは地面に落下していた。クモは卵塊がなくなっているのに気づかないのか、分かっているにもかかわらず予定された作業を途中で中止したり、変更したりはできないのか、当然のように糸をかけ続けている。4時頃改めて観察に行くと卵のうは完成していた。中に卵がないとは分からないくらい、ふっくらと仕上がっていた。クモはまだその上に木の皮やゴミなどの付着物をつけ続けていた。

【あつかましいヨコヅナサシガメ】

観察している桜の木ではヨコヅナサシガメの幼虫が集団で越冬している(図5)。時には200~300を超すような数が、枝の付け根や幹の窪みに体を寄せ合い重なるようにしてうごめいている。寒い日には身じろぎもせずに過ごしているが、暖かい日には何匹かが獲物を求めてゆっくりと辺りを歩き回る。運よく(ジョロウグモにとっては運悪く)卵のうを見つけた幼虫が口吻を刺し込んでいる。獲物を見つけると仲間を呼ぶ習性があるのか、何匹かが集まっていることが多い。クモが卵のうを完成して去った後なら分かるが、まだ母グモがいる間から隙あれば近づき、空いているところから口吻を刺し込んでいる。クモが動くとサシガメは一旦少し離れるがすぐに集まってくる。最終的に母グモは追い出され、離れたところから我が子が食われるのを恨めしそうに(私の感想)見ていた。

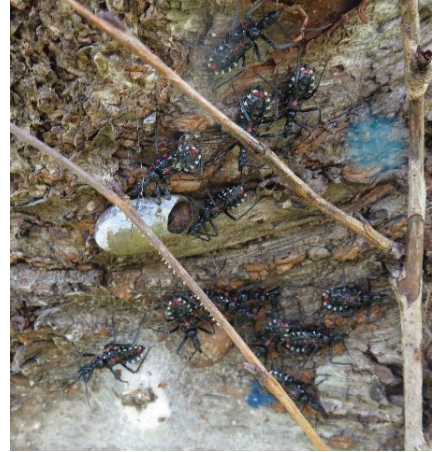


図5. ヨコヅナサシガメの幼虫。

参考文献

西野真由子 2007. 野外における産卵後のジョロウグモ. *Kishidaia*, 92: 22-26.

産卵を2回行うジョロウグモはどれくらいいるか（その2） （兵庫県姫路市における2016, 2017年の調査）

船 曳 和 代

はじめに

筆者は2015年に兵庫県姫路市内で、産卵を2回行ったジョロウグモを調査し、その数は思ったよりも多いことが分かった（船曳2022）。これは、12月の平均気温が高かったことで、12月中に産卵できるクモが増え、2回目の産卵数増加につながったと思われた。では、気温の高低は2回目の産卵にどのような影響を及ぼしているのか、2016年と2017年の2年間続けて観察した。

方 法

観察場所や方法は2015年と同じである（船曳2022）。ただし、2015年は手の届くおよそ2m以内に作られた卵のうの上にいる個体にだけマーキングしたが、今回は手の届かないところにいる個体にも、可能な限り印をつけた。手が届かない時はススキの穂先でクモに軽く触れ、下がってきたところで印をつけて元へ戻すという方法をとった。

結果と考察

2016, 2017年は、両年とも桜の木はモンクロシャチホコの幼虫による食害がひどく、ジョロウグモの産卵場所はほぼ枝や幹に集中していた。

2016, 2017年の結果に加え、先に報告した2015年のデータ（船曳2022）を併せて、確認できた卵のうの数を日ごとにまとめたものが表1、卵のう数と母グモへのマーキングの有無を月ごとにまとめたものが表2である。図1-3は、日ごとに確認された卵のう数をグラフにしたもので、気象庁のデータに基づく日ごとの気温の変化を併せて示している。2016, 2017年における産卵の全体的な傾向は以下のものであった。

2016年の産卵は10月14日に始まり、次は4日後の18日で、2015年とあまり変わらなかった。しかし、10月中に確認した卵のうは60個と2015年の半分ほどしかなかった。11月に入ると増え、11月全体では176個とわずかながら2015年を上回った。12月は65個と前年並みで、総数は301個と2015年より50個少なかった。

2017年の結果は他の年とはかなり異なるものになった。最初の産卵は10月20日で、過去2年に比べると1週間ほど遅かった。10月中に確認された卵のうは72個で、2015年より少なかったものの2016年よりはやや多かった。11月に入ると急速に増え、11月3日の1日だけで42頭が産卵した。これは3か年通した全観察期間中で最も多かった。印付けと写真撮りに半日以上奮闘した。前後にも20~30頭と多い日があり、11月中に産卵した個体は393頭、全体の80%余りにもなった。ところが、月が変わると急減し、12月中に産卵したものはたったの11頭であった。総卵のう数は

表 1. ジョロウグモの卵のう数 (2015–2017 年 10–12 月). 日ごとに確認された卵のう数 (括弧内は 2 回目の産卵であることが確認された卵のう数, 内数) を示す.

日	10月			11月			12月		
	2015	2016	2017	2015	2016	2017	2015	2016	2017
1					8	4	3	7 (2)	2
2				10	2	22		7	
3				8	15	42	23 (6)	1	
4				7	6	32		4 (3)	
5					9	6		11 (1)	6
6				18	13 (1)	6			
7				14	1	29	2	4 (1)	
8				11 (1)	3	34 (1)			
9				7	8	25	1		
10				5		8	2 (1)		
11				2	3	26	13 (3)		1
12				1	7	5	2 (2)	2 (2)	
13	1			5	7	4	1		
14		2		5	13(1)	25	1	11 (5)	
15				9	1	24	3		1
16				6			9 (7)		
17				5	3		1 (1)		
18		1		8	4	8			
19	3			1	24 (1)	8			
20	2	2	1	7 (2)	12 (2)				
21	5		5	15 (5)	4 (1)	2		8 (5)	
22	6	5		4 (2)	6 (1)		2		
23	4		1	7 (2)	7 (1)	17 (1)		4 (2)	
24	14	4	3	6 (2)			2 (1)	1	
25	9		5		4		1	3	1
26	4	13	7	7 (2)	1				
27	11	5	7			27		2	
28	18	3	9	2	15 (5)	6			
29	11	10	13			13			
30	18	5	17	1		20 (1)			
31	10	10	4						
合計	116	60	72	171 (16)	176 (13)	393 (3)	66 (21)	65 (21)	11

表 2. ジョロウグモの卵のう数 (2015–2017 年). 月ごとにまとめた数を示す. 印無: 雌に印を付けることができなかったもの; 印付: 雌に印を付けることができたもの; 2 回目: 2 回目の産卵として確認できたもの.

	10月			11月				12月			3 か月合計			
	印無	印付	合計	印無	印付	2 回目	合計	印無	2 回目	合計	印無	印付	2 回目	合計
2015年	54	62	116	104	51	16	171	45	21	66	203	113	37	353
2016年	9	51	60	118	45	13	176	44	21	65	171	96	34	301
2017年	16	56	72	213	177	3	393	11	0	11	240	233	3	476

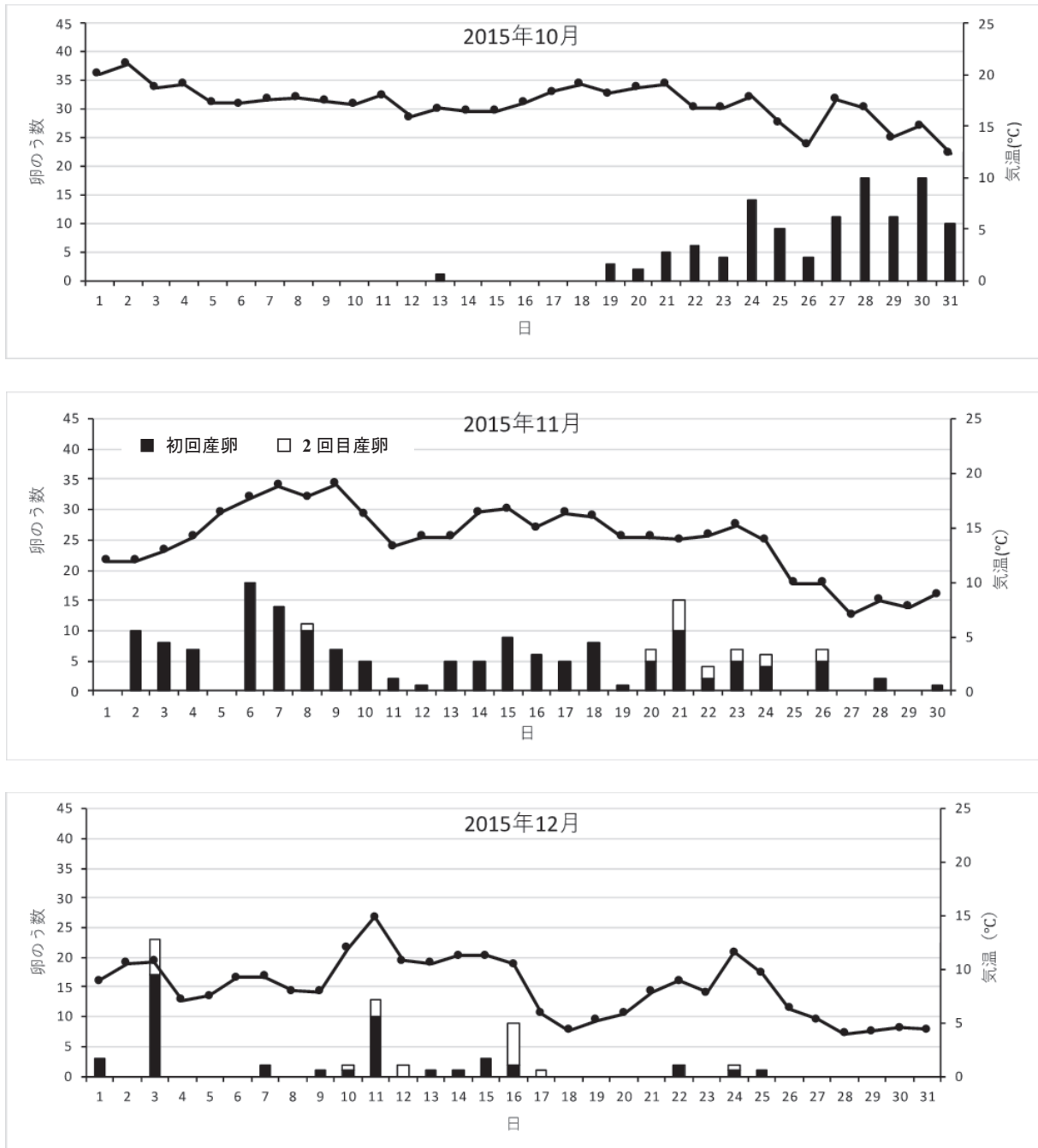


図1. 2015年(10, 11, 12月)におけるジョロウグモの産卵と気温の変化. 棒グラフは日ごとに確認された卵のうの数(黒: 初回産卵, 白: 2回目の産卵), 折れ線グラフは日ごとの平均気温(気象庁のデータ)を示す.

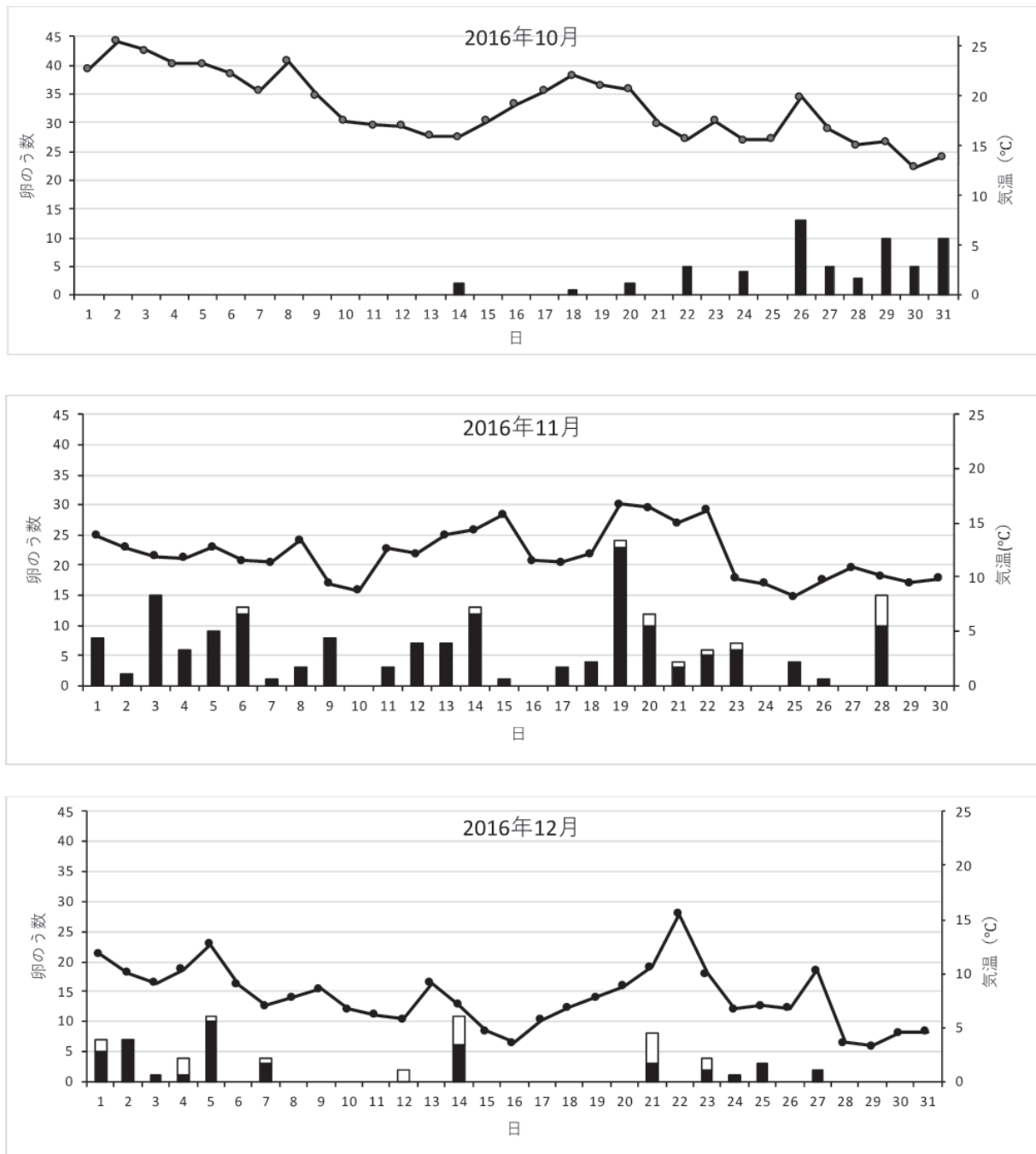


図2. 2016年（10, 11, 12月）におけるジョロウグモの産卵と気温の変化. 棒グラフは日ごとに確認された卵のうの数（黒：初回産卵, 白：2回目の産卵）, 折れ線グラフは日ごとの平均気温（気象庁のデータ）を示す.

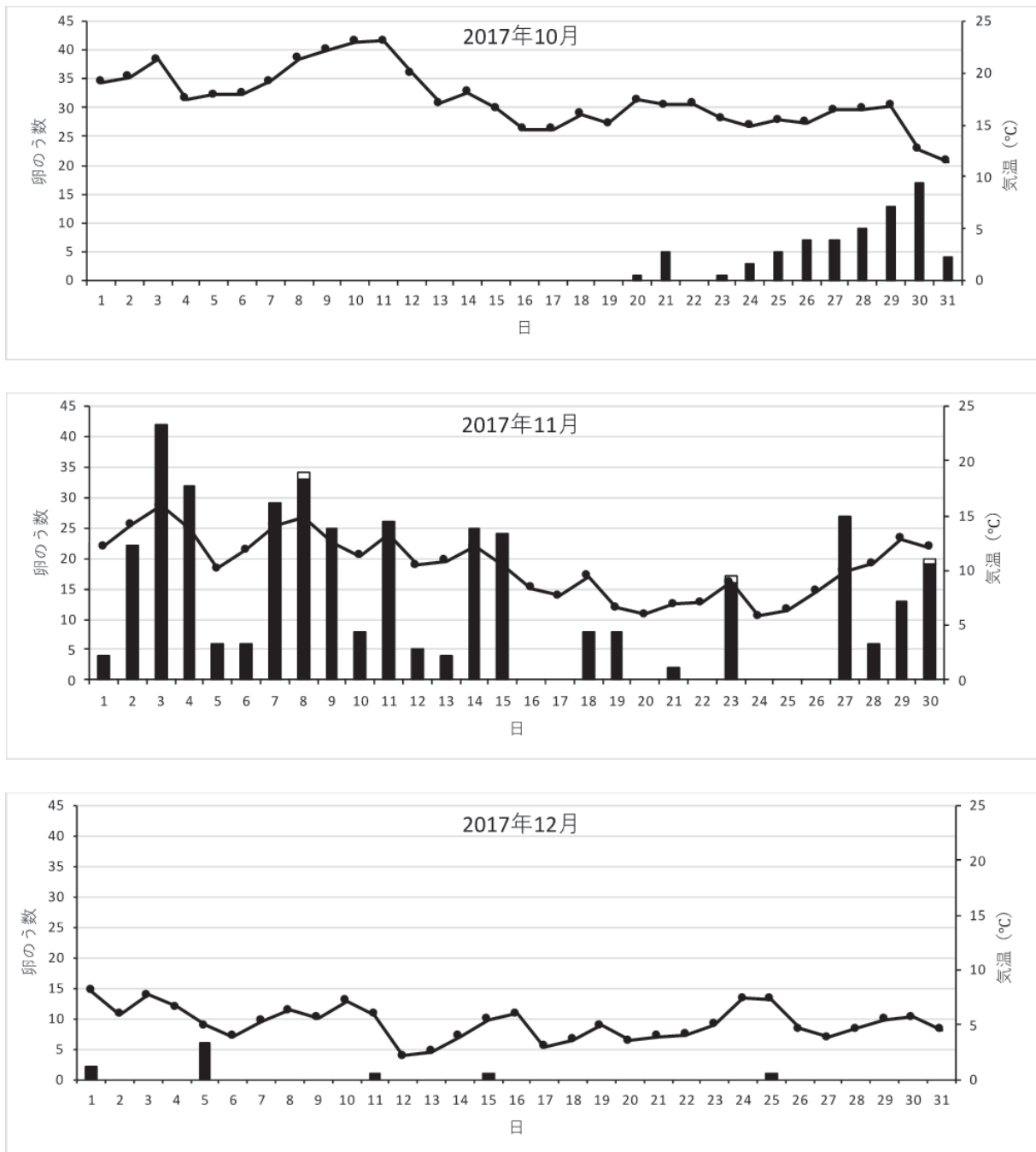


図3. 2017年（10, 11, 12月）におけるジョロウグモの産卵と気温の変化. 棒グラフは日ごとに確認された卵のうの数（黒：初回産卵, 白：2回目の産卵）, 折れ線グラフは日ごとの平均気温（気象庁のデータ）を示す.

表 3. ジョロウグモの初回産卵と 2 回目産卵の記録 (2016 年).

	初回産卵		2 回目産卵		初回産卵から 2 回目の産卵 までの日数
	木の番号	産卵日	木の番号	産卵日	
1	3	10月14日	2	11月14日	31
2	特定できず		6	11月28日	—
3	9	10月20日	8	11月21日	32
4	9	10月31日	9	12月4日	34
5	14	11月5日	13	12月21日	46
6	14	11月6日	13	12月21日	45
7	16	11月3日	17	12月23日	50
8	17	11月6日	18	12月14日	38
9	16	11月3日	18	12月14日	41
10	19	10月22日	19	11月19日	28
11	19	10月24日	19	11月20日	27
12	28	11月6日	27	12月21日	45
13	29	10月28日	28	12月2日	35
14	29	10月26日	34	11月28日	33
15	特定できず		37	11月28日	—
16	37	11月6日	37	12月21日	45
17	37	11月5日	37	12月23日	48
18	41	11月1日	41	12月7日	36
19	42	10月29日	46	12月1日	33
20	47	10月27日	47	12月5日	39
21	47	11月3日	47	12月12日	39
22	47	11月6日	47	12月14日	38
23	48	10月26日	48	11月22日	27
24	特定できず		48	12月14日	—
25	48	10月31日	49	12月4日	34
26	51	10月14日	52	11月6日	23
27	52	10月26日	52	11月23日	28
28	55	10月26日	55	12月4日	39
29	55	10月26日	55	12月12日	47
30	特定できず		56	12月14日	—
31	56	10月29日	57	11月28日	30
32	58	10月22日	57	12月21日	60
33	60	10月22日	59	11月20日	29
34	60	10月29日	59	11月28日	30

476 個と 3 年間で最も多く、2015 年の 1.4 倍、2016 年の 1.6 倍にもなった。産卵前にいたクモの数はかぞえていないのではっきりしたことは言えないが、かなり多かった。

次に 2 回目の産卵をした個体について検討する (表 3)。2016 年も 2015 年と同じく 11 月 11 日までに産卵した個体に印をつけた。期間内に 127 頭が初回産卵し、うち 96 頭 (10 月 51 頭, 11 月 45 頭) に印をつけることができた。目についたものほぼ全てに印をつけたのに、手に届くところに限った 2015 年より 20 頭近く少なかった。これは 10 月中に産卵した個体が大幅に減少したためと考えられる。2 回目の産卵を確認できたのは 34 頭で、印を付けた個体の 35.4% になり、2015 年の 32.7% をやや上回った。しかし、この結果から期間内に初回産卵を終えた 127 頭が 2 回目の産卵をしたと

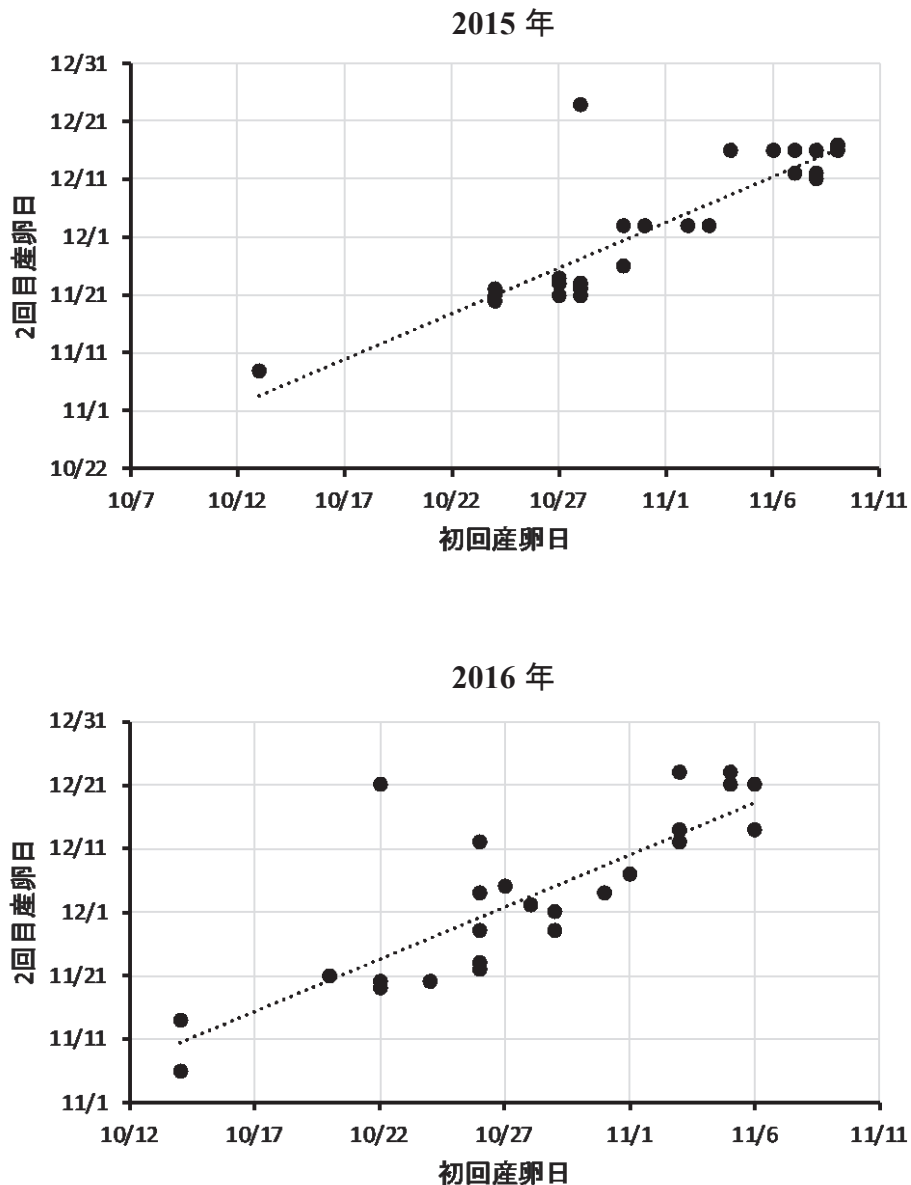


図4. ジョロウグモの初回産卵日と2回目産卵日の関係。

思われる数を推計すると45頭になり、初回産卵を記録した267頭全体の16.9%で、2015年より3%ほど少なかった。

2回目の産卵は11月が13頭、12月が21頭で、3分の2近くが12月に入ってからであった。このうち初回産卵日を特定できたのは30頭で、うち19頭は10月中に初回の産卵を終えていた。2015年、2016年の初回産卵日と2回目産卵日の関係は図4のようになり、両年とも高い相関関係を示した(2015年: $R^2=0.743$, $N=31$, $p<0.001$, 2016年: $R^2=0.689$, $N=30$, $p<0.0001$)。初回産卵を早く終えたクモは2回目の産卵を早い時期に迎えることができるようだ。

初回産卵から2回目の産卵までにかかった平均日数は、2015年の32.2日に対して

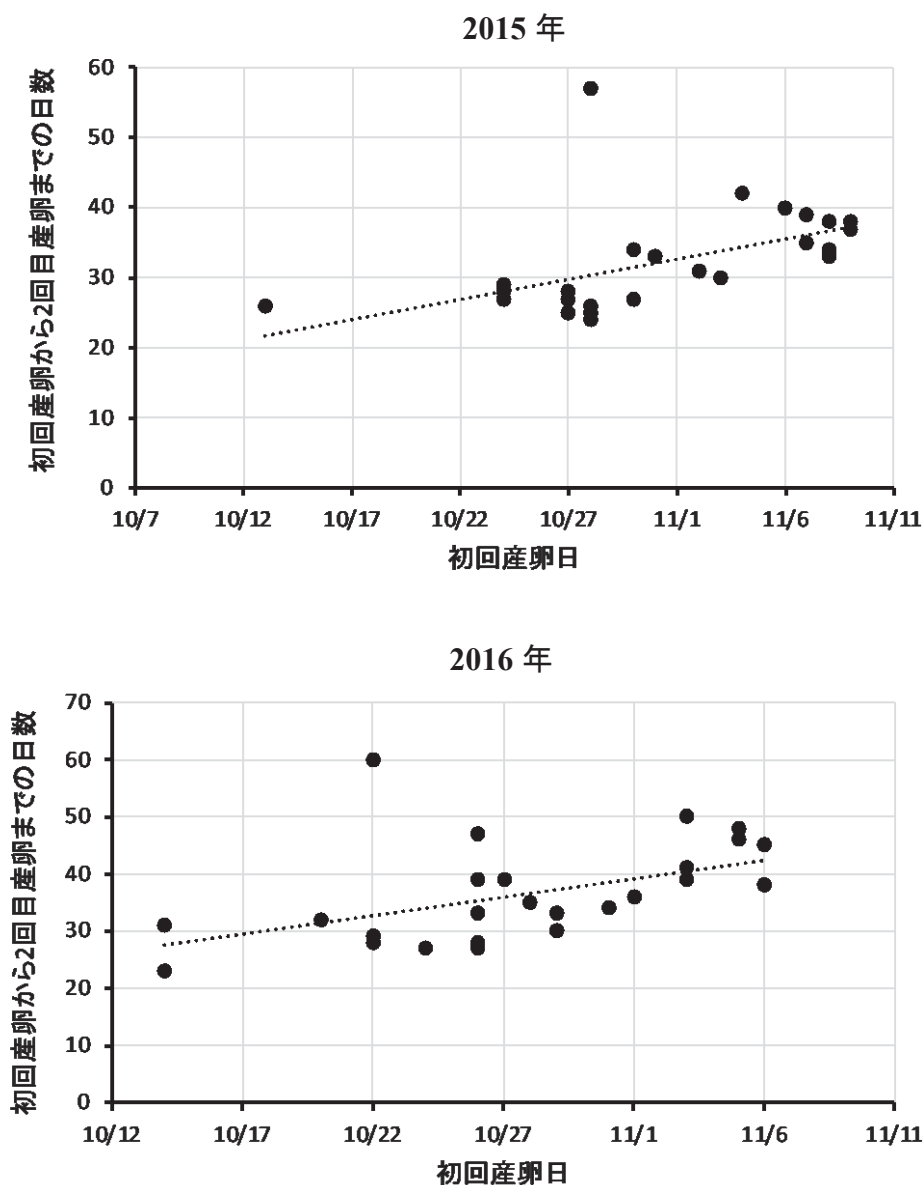


図 5. ジョロウグモの初回産卵日と初回産卵から 2 回目産卵までの日数の関係.

2016 年は 37 日と、5 日ほど長かった。初回産卵日と初回産卵から 2 回目産卵までにかかった日数との間には 2015 年、2016 年ともに有意な相関があった (2015 年 : $R^2 = 0.279$, $N = 31$, $p < 0.005$, 2016 年 : $R^2 = 0.254$, $N = 30$, $p < 0.005$) (図 5)。また、初回産卵の時期にかかわらず、2 回目の産卵までには少なくとも 20 日以上の日数が必要なようだ。

図 4, 図 5 を見ると 2015 年、2016 年とも、他のものから大きく外れた個体が 1 頭ずついる。それらの個体の初回産卵日は 2015 年が 10 月 28 日、2016 年は 10 月 22 日で、いずれも 10 月中に初回産卵を終えている。本来なら 2 回目の産卵は 11 月になるはずである。ところが 2015 年は 12 月 24 日、2016 年は 12 月 21 日と非常に遅く、2 回目の産卵までに多くの日数がかかっているが、その原因は分からない。

産卵木については、2回目も同じ木に産卵したのが13頭、隣の木が14頭、1本置いて隣が1頭で、2015年と同じく90%以上が同じ木か近隣の木であった。卵塊の大きさは初回、2回目とも手に届かないものが多く、計測しなかった。

2017年はかなり変わった結果となった。期間内（10月20日から11月11日）に初回産卵した個体は3年間で最も多く、305頭にのぼった。このうちの233頭に印をつけ、この年は70頭近い個体が2回目の産卵をしてくれるものと楽しみにしていた。ところが、11月に3頭を確認したのみで、個体の特定もできなかった。2回目の産卵が少なかった原因は11月、12月の気温が低かったことに加え（表4）、もともといたクモが多かったことで餌不足が加速し、産卵準備が十分出来なかったためかもしれない。また、12月に月平均気温が5.1度という低温の日が続いたことによって、産卵できないまま死亡する個体もあったと思われる。

表4. 2015–2017年の兵庫県姫路市の月平均気温(°C) (気象庁気象データによる)。

	10月	11月	12月
2015年	17.2	13.9	8.3
2016年	18.9	12.1	7.8
2017年	17.4	10.5	5.1

まとめ

兵庫県姫路市において2回産卵した個体は、2015年は37頭（推計で初回産卵した個体の約20.3%）、2016年は34頭（同じく推計で初回産卵した個体の16.9%）と多かったが、2017年は3頭と1%にも満たないという変化に富んだ結果になった。この3年間の観察からみると、2回目の産卵には11月から12月にかけての気温が大きく影響していると思われる。勿論それだけではなく、生息しているクモの数や餌の多少（川の水が干上がってしまったり、下草刈りの時期が早まったりすると虫の発生が押さえられる）などによって左右されるのだろう。地球温暖化が進みつつあるとはいえ、単純に多い年ばかりではないようだ。

謝辞

2017年の観察を終えた後、すぐに3年間のまとめたものを出すべきであったが、時間がかかってしまった。当初2015年の観察分を先に出し、後の2年間は続編として書こうと思って準備していた。その後、榊元敏也氏にデータを見てもらったところ、3年間のまとめて出すべきだとのアドバイスを受けた。しかし、最近は視力も体力も衰え、まとめられないまま時間が過ぎた。今回、せめて3年間観察したことだけでも記録に残しておきたいと思い投稿した。図の作成やデータの解析、文章のアドバイスなど榊元敏也、智子夫妻にはいろいろな面でお世話になった。感謝申し上げます。

参考文献

船曳和代 2022. 産卵を2回行うジョロウグモはどれくらいいるか（兵庫県姫路市における2015年の調査）。くものいと, 55: 36–42.

京都府新記録のクモ類

吉田 真

2013年から2021年までに京都府で採集したクモ類のうち、CD 日本のクモ Ver.2020のリストに掲載されていない京都府新記録の11種の採集記録を報告する。谷川明男、緒方清人、須黒達巳、田中穂積、吉田哉の諸氏には標本の同定でお世話になった。厚く御礼申し上げる。

マシラグモ科 (1種)

ヨコフマシラグモ *Falcileptoneta striata* (Oi 1952) (1♂, 2016.4.12, 京都市左京区一乗寺大谷, 採集者: 吉田真)

ヒメグモ科 (2種)

クロホシミジングモ *Phycosoma nigromaculatum* (Yoshida 1987) (1♀, 2016.4.16, 京都市左京区大原小出石町, 採集者: 吉田真)

コアカクロミジングモ *Yaginumena mutilata* (Bösenberg & Strand 1906) (1♂, 2014.6.8, 京都市左京区大原野村町, 採集者: 吉田真)

コガネグモ科 (1種)

ヘリジロオニグモ *Neoscona subpullata* (Bösenberg & Strand 1906) (1♀, 2021.5.8, 京都市左京区修学院南代町, 採集者: 吉田真)

アシナガグモ科 (1種)

オオクマヒメドヨウグモ *Diphya okumae* Tanikawa 1995 (1♀, 2016.6.1, 京都市左京区静市静原町, 採集者: 吉田真)

サラグモ科 (1種)

タテヤマテナガグモ *Microbathyphantes tateyamaensis* (Oi 1960) (1♂3♀, 2016.4.12, 京都市左京区一乗寺大谷, 採集者: 吉田真. 2♂1♀, 2017.4.3, 京都市左京区一乗寺大谷, 採集者: 吉田真)

ハタケグモ科 (1種)

コタナグモ *Cicurina japonica* (Simon 1886) (1♂, 2016.4.12, 京都市左京区一乗寺大谷, 採集者: 吉田真. 1♀, 2017.4.3, 京都市左京区一乗寺大谷, 採集者: 吉田真)

コモリグモ科 (3種)

ハタチコモリグモ *Alopecosa moriutii* Tanaka 1985 (1♂, 2016.6.6, 京都市左京区大修学院月輪寺町, 採集者: 吉田真)

ハタハリゲコモリグモ *Pardosa diversa* Tanaka 1985 (5♀, 2016.6.1, 京都市左京区大原井出町, 採集者: 吉田真)

アライトコモリグモ *Trochosa ruricola* (De Geer 1778) (5♀, 2016.6.6, 京都市左京区大修学院月輪寺町, 採集者: 吉田真)

ハエトリグモ科 (1種)

クモマハエトリ *Nandicius kimjoopili* (Kim 1995) (1♂, 2021.5.8, 京都市左京区大修学院南代町, 採集者: 吉田真)

引用文献

新海明・谷川明男・安藤昭久・池田博明・桑田隆生, 2020. CD 日本のクモ Ver.2020. 著者自刊.

ヒトエグモの追加記事

西川喜朗

前号の「くものいと, No. 54」に「兵庫県のヒトエグモの採集記録」を報告しましたが、採集日を書き忘れたので追加報告します。あわせて、その他の採集記録と観察記録を報告します。

前号の記事（兵庫県西宮市のヒトエグモ）の採集日は、2020年12月5日である。なお、この採集地の西宮市上鳴尾町は、甲子園球場の北東約500mの住宅街である（奥野幸樹採集）。

その他の記録

- (1) 京都府京都市左京区三宅町, 三宅八幡宮, 110 m alt. (瓦間), 1976年3月26日, 1♀, 富永修採集。
- (2) 奈良県奈良市十輪院町, 築15年の作業場, 1♂, 1994年2月20日頃, 松森哲重採集。
- (3) 大阪府大阪市南区上汐町2丁目, 明治時代に建設の木造2階建ての民家, 1階の押入れの中に積んであった餅箱の中。紙のように平べったいクモを筆者ら家族が発見。観察日は不詳だが, 1960年ごろ。この頃, 筆者は, 昆虫採集はやっていたが, クモには関心がなかったので, 標本はない。大変薄くて素早く動くので, びっくりした記憶がある。

謝辞

貴重な標本, 資料を提供していただいた奥野幸樹さん, 富永修さん, 松森哲重さんに厚くお礼申し上げます。

引用文献

西川喜朗, 2021. 兵庫県のヒトエグモの採集記録. くものいと, 54: 58–59.

訃 報

本会会員の山野忠清さんが昨年（2021年）6月にお亡くなりになりました（私たちが知ったのは8月になってからでした）。山野さんは、本会創立当時からで、1992～1996年度の5年間は会計幹事、1997～2006年度の10年間は会長を務められ、さらに、会長を退かれてから2007～2018年度の12年間は庶務幹事として、本会の運営を支えてこられました。まことに感謝の念に堪えません。謹んで哀悼の意を表します。

（事務局）

山野忠清さんの名言

清水 裕行

昨年の8月に加村さんから山野忠清さんの訃報が届きました。思いもよらない事態で、実に青天の霹靂です。山野さんとは旧い付き合いでした。心からお悔やみを申し上げるとともに、山野さんの見識を良く物語るエピソードを御紹介して、手向けの言葉とさせていただきます。

多くの研究会では会誌を刊行しています。これは研究発表や報知・意見交換の場として利用されています。会員（正会員・購読会員）に投稿資格があることは言うまでもありませんが、それ以外の受け入れ条件に関しては、会によって差異が見られます。あからさまに「会員以外の寄稿は受け付けません」と明示しているケースは少ないと思いますが、実際の運営上“寄稿は会員に限る”として通しているところもあるようです。

これに対して我が関西クモ研究会の出版物ではそのような制限は一切なく、これまでも会員以外が執筆した記事も掲載してきました。しかしこれに対して、「執筆者は会員に限定するべきではないか」という意見が出たことがあります。その趣旨は、「会の出版物は会費で運営されているのだから、執筆者は会費を納入した者に限るべきである。そうしないと、金を出した人が損をする」ということのようにです。

私の知る限りでは、この「正直者(?)が馬鹿を見る」という意見には反発する人が、会員の中には多かったようです。私もその一人でした。これに関して、最も明快な主張を提示したのが山野さんでした。

山野さんの発言の趣旨は以下の通りでした。

1. 当会の目的は突き詰めるならば「クモの研究」である。
2. 会の活動は、出版を含めて、会の目的を達成するために行われるものである。従って、それができれば会員の利益になったと言える。
3. 言い換えると、会と会員にとって有益な記事が提供されるならば、執筆者が会員

であるか非会員であるかにはかかわらず、すべて歓迎すべきである。

4. 本来ならばそのような有益な記事の提供者に対しては、原稿料を差し上げてこれに報いるべきところを、無償で済ませていただいている。会員にとって不利益なことは何もないはずである。

実に筋の通った、かつ大局に立った主張です。確かに会員の権利の中には、「会誌への寄稿」があります。しかし、それは必ずしも「非会員は排除する」という姿勢には繋がりません。むしろ杓子定規な対応は、山野さんの言う「会員の利益」には反すると考えられます。一方、会員の排他的権利としては、「会誌を毎号受け取ることができる」というのがあります。非会員の場合は、「残部に余裕があれば購入可能」といった程度です。これだけの差があれば、「会員の優遇措置」としては十分ではないでしょうか。

上記のような山野さんの小気味よい啖呵がもう聞けないのは残念なことです。思えば近年になって、野戸章さん、吉田哉さんのような私と同世代の方々が鬼籍に入っておられます。誠に寂しいことです。私自身健康には自信がないのですが、お三方の分も精一杯生きねばと痛感するこの頃です。

関西クモ研究会 2021 年度例会の記録

2022 年 1 月 23 日（日）に Zoom をもちいたオンライン方式で、2021 年度の例会が開催された。開催方式は大阪市立自然史博物館でのオンサイト開催との併用を計画していたものの、COVID-19 の感染拡大状況を承けて急遽オンライン方式のみによる開催に変更された。例年とは大きく異なる方式であり、企画側も参加者も例年とは大きく異なる参加の仕方を模索する機会となった。

役員会

例会に先立って、メールを連絡手段として役員間で協議をおこない、報告および承認を得る事項について確認・補足をおこなった。参加者：加村隆英（会長・編集）、原口岳（庶務・編集）、吉田真（会計）、西川喜朗（顧問）、船曳和代（顧問）、関根幹夫（会計監査）。

例会

出席者

荒川真、伊規須貞子、岡田純二、加村隆英、塩崎哲哉、荘司康治郎、関根幹夫、谷川明男、千田高史、中村香代子、原口岳、福田孝男、松本吏樹郎、山之内俊哉、山本一幸、吉田徹也（計 16 名）。

講演発表

1. 松本吏樹郎：「日本産 *Zatypota* 属の未記載種とその寄主操作、および同属によるカグヤヒメグモの利用」
2. 原口岳：「大阪府の生物多様性データベース構築に向けて」
3. 谷川明男：「奄美諸島産カワリアシダカグモ」
4. 関根幹夫：「奈良県のカネコトタテグモ：新産地と観察記録」
5. 加村隆英：「コモリグモ科の日本新記録種」

※ 講演予定であった西本さん、清水さんは Zoom 上での発表に必要な機材の持ち合わせが無いことから講演をキャンセルされた。

※ 講演・役員報告の終了後に出席者による近況報告をおこなった。

報告・承認事項

任期満了に伴う会長の交代について

2021 年度～2022 年度の関西クモ研究会の会長は加村隆英さんに担っていただく事となった経緯について説明し、これに伴い「くものいと」編集委員を加村さん・原口の 2 名体制としたことを報告した。

今回収集したメール情報利用の承認

ハイブリッド開催にあたっては URL などをお伝えするためにメールなどの通信手

段が必要であったことから、今回会員のメールアドレス情報を新たに記録・保管していることを報告し、今後の連絡手段として利用することの承諾をお願いした。

今後の関西クモ研究会の活動方針について

採集会などの野外活動については、準備に時間を要することを考慮すると、現状のように刻一刻と感染症の流行状況が変化していることを踏まえると予定を立てることが難しい旨を報告した。また、例会については今回予定していたようにオンラインとオンサイトを併用するハイブリッド型を今後も継続する可能性が高いことを報告した。更に、ハイブリッド型の例会開催に伴い、追加支出として2,200円が発生することを連絡した。

「くものいと」の印刷について

2021年3月に発行した第54号以降について、印刷製本を外部委託に変更したことに伴い、印刷費用が従来に比べて増加したことを報告した。なお第54号の印刷外注費用を含めて、現行の会員一人あたり年会費1,000円で支出超過に至ってはいないことも報告した。

会員数報告

新規入会者数は1名であったことを報告した。追補：退会者が2名、逝去された方が3名あったため、会員数は92名となった。

報告者：庶務幹事 原口岳

関西クモ研究会 2020 年度会計報告

収入

2019 年度からの繰越金	712,410
会費 2020 年度前受け分繰り入れ	41,000
会費 2020 年度分入金	24,000
会費過年度分入金	23,000
受取利子	7
くものいと別売り (1 部)	680

合計

801,097

支出

2020 年度採集会中止 連絡ハガキ発送	5,796
2020 年度例会中止 連絡ハガキ発送	5,796
くものいと No. 54 印刷費	55,270
くものいと No. 54 発送用封筒	1,114
くものいと No. 54 郵送料	17,460
送金手数料	100
2021 年度への繰り越し	715,561

合計

801,097

会費前受け状況

2020 年度末における会費前受け分の合計は、74,000 円である。その内訳は次のとおり。2021 年度分 43,000 円；2022 年度分 15,000 円；2023 年度分 7,000 円；2024 年度分 3,000 円；2025 年度分 2,000 円；2026 年度分 1,000 円；2027 年度分 1,000 円；2028 年度分 1,000 円；2029 年度分 1,000 円。

上記のとおり、報告します。

会計幹事 吉田真

2020 年度会計監査報告

関西クモ研究会 2020 年度会計について、関係諸票書類に基づき監査を行った結果、適正に処理されていることを確認いたしましたことを報告いたします。

2021 年 5 月 2 日 会計監査 関根幹夫

関西クモ研究会

会 長：加村隆英 E-mail: kamura@haruka.otemon.ac.jp

庶務幹事：原口 岳 E-mail: h1r1g3ch2@gmail.com

会計幹事：吉田 真

編集委員：加村隆英・原口 岳

会計監査：関根幹夫

顧 問：西川喜朗・船曳和代

ウェブサイト：http://kansaikumo.sakura.ne.jp/kansaikumo/index_kansaikumo.html

くものいと 第55号
2022年3月31日発行
関西クモ研究会

印刷 株式会社オーエム